

怠惰な魔女は眠りたい

ネコジマネコスケ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

怠けるために全力を尽くす魔女がいた。

出世は要らない、祖国の為に戦う勇士でもない。

押し付けられた部隊と口煩い新人に囲まれて、昼夜を問わずの出撃に追われる毎日。

酒と薬を相棒に、彼女はただ、眠りたかった。

目次

とある静かな夜に	1
少女来訪	8
駆け回る日々	19
経験と年齢	27
熟練	35
魔法のカード	45
消極的未來への手紙	55
酒とズボン	65
重石の骨	75
輝けるもの	85
然るに魔女は眠りたい	94
故に魔女は眠らせない	101
やはり彼女は眠れない	112

とある静かな夜に

砂漠の夜は寒い。

びろうどの様に広がる帳はさも暖かく、柔らかい様に見てくれを整えてくれてはいるが、その実南極の氷山よりも冷たく凶暴である。そんなことはこの地に住まう者なら誰でも知っていた。将官から一兵卒に至るまで、夜間に毛布を手放すような真似はしないだろう。

どこまでも、それこそ途方もないという形容詞でも足らない程に、星空はうつろに続いている。煌く赤光はないものの、さりとして生物的な揺らめきもない。

感傷的になるには十分だが、それをぶつける相手も居ないではつまらないものだ。満天の夜空を独り占め、そんな風に言えば多少魅力的な響きにもなるだろう。

いやはや、独り占めではなく独り法師なのだが、さあきて、そんな自虐も愈々くだらない。

タリア・スミスは喧しいエンジンの駆動音を聞き流し、夜間哨戒の任務を遂行していた。彼女にナイトウィッチの才はなかったが、部隊にその技能を持つ者は居なかったし、それ以前に彼女以外に空を飛べるものすら居ない有様であった。

つまり危機的状況と評されて然るべき状態、そんな中で少女——女性は呑気に空を見上げて観光気分である。

彼女が出撃前に確認した限りで本日は襲撃の周期から外れている。とはいえ、油断を突くから奇襲なのであって、寝込みを襲うから夜襲なのであって、全く警戒しないというのもいけない。そんな根拠なので凡そ戦意というものには乏しい様子だった。

たぶん来ないだろうけど、と来てみたはいいが本当に暇である。暇なのだ。僚機が居たならお喋りでもして時間を潰せたのだが、ないものねだりしても仕方がない。独り言は趣味ではない。ならば、と見上げてみたものの、結局空は空なのだ。いくら見つめても劇的な変化が望める道理もない。

どうしたものか。油断する程の余裕もない。のんびりしていると

ころに砲撃を受けるのはゴメンなのだ。シールドで防げるには防げる。ただ痛い。疲れる。よって寛ぎきれない。戦場でだらだとする方がおかしいとも言えるだろうが、それはそれ。

眠いものは眠い。休みたいものは休みたいのである。

そんなえも言われぬ、文句とも取れぬ何事かを脳裏に瞬かせながら、タリアがふと顔を上げた。

あら——と。

彼女の固有魔法がひとつの反応を示した。敵意、害意、或いは殺意。その類のグロテスクな感情が吹き荒れている。我二本足を排除せん——明確なメッセージを受信して、果たして彼女は顔色一つ変えず、緩慢とした挙動で背中の狙撃銃を構えた。

狙撃銃としか彼女はその銃を知らない。弘法筆を扱はず、と言えは聞こえはいいが、こだわりがないだとか専門的な話が殆ど分からないだとか、そういった表現の方が妥当といえよう。

使えるものは使う、使えたなら他はどうでも良い。この女にとって得物とはそういうものらしい。

高倍率のレンズの先には黒いエイ。凶鑑でしか見たことのない海洋生物のカタチをした異形だ。甲高い鳴き声は距離が遠い為聞こえてこない。砲撃を超越してこないところを見るに、未だこちらの存在には気づいていないようだ。好都合である。

息を吸う。一撃で仕留める必要はない。拠点からは離れている。

「こちらクローバー7、敵機発見。先制攻撃を仕掛けます」

了解、と返される前に引き金を絞る。真つ直ぐに弾丸が敵機の左翼に吸い込まれ、大口径故その半ばを大きく削り取った。率直に申し上げるとすれば狙いがそれだ。実を言えばあまり狙撃が得意ではないのだ。無理をしてやっているわけでもないが、兎に角として得手ではない。

当たっただけ御の字として次弾を装填、直様ぶち込む。次は右に逸れる。ああもう、と呟いて更に撃ち込む。何故得意でもない狙撃銃を用いているのかといえば簡単なことで、遠くからドッグファイトを避けてある程度一方的に射撃が行えるから、ただそれだけだった。

近接格闘戦は面倒だ。当然である。何が好きで被弾するかもしれない、更に機体に体当たりされるかもしれない位置で戦わなければならんのか。どうせ落とすのは同じなのだから、遠くからの砲撃を避けつつ、重たい一撃できっちり削っていくのがいい。

言い訳をやめて率直に言おう。機銃も悪くないのだが、散ってしまふ弾を一点に集中させるのが手間に思えて仕方がないのだ。

怠慢というよりも性根がだらけている。

タリアは一発一発を微妙に中心のコアから外しながら、しかし命中弾によって体勢を崩し砲撃の狙いを明後日の方向へと無理矢理に変えながら、結局十発程度の弾薬を消費して中型ネウロイを撃墜した。

真直ぐとした棒を身体の正面に突き立てると考えてみていただきたい。この時その人物の右肩を押したなら、必然、そのとき棒の先端の方向も彼の人から見て右方へと変わるだろう。それなりの魔力量と大口径の銃器があつての理論ではあるが、この時彼女が行った攻撃とはそれだけのことだった。

高度な機動戦はない。寧ろやらない。何故なら疲れるから。

そんなどうしようもない理論で戦ってしまう馬鹿なのである。しかも勝ってしまうのである。ふざけやがれ、と言われたことは数知れず、そんな女なのだ。

涼しげに硝煙臭い茶髪を掻き上げ、タリアは一転して気怠げにため息をついた。

「いい加減来るのをやめてくれたらいいのに」

無線機に敵機撃墜、とだけ報告してまた空を見上げる。晴れて撃墜記録に数字がひとつ足されるわけなのだが、大して嬉しくもない。

考えてもみて欲しい。コツが分かってからというもの一対一の戦闘は（夜間戦闘の八割は）終始このような有様だ。遠くからの攻撃なので避けるのは容易い。つまり多少避けながら狙いをつけて撃つだけの作業なのだ。

強い敵来い、などというほどのウォーモンガーではないにしても、それで褒められて今ひとつ心に響くものがないというのもキテレツではないはずだ。

偶に聞かされる話によればネウロイがある程度学習し、形態を複雑に変化させて襲撃に臨んでくる地域も多いという。そういった地区の魔女からは苦情を受けそうなのだが、アフリカの辺境、しかも微妙に激戦区とは言い難い区域の異形というのは、どうにも勤勉とはいかないようだった。

それほどにやる気がないのなら、いつそ襲撃自体をやめてくれたならどれだけ楽だろうか。空を飛ぶのは楽しいが、平和的に旅行でもさせていただきたい。そうは問屋が卸さないから襲って来るのだろうけれども。

彼女は思い付いたように無線機に口を近づけた。頭から突き出た黒猫の耳が合点承知とばかりに駐屯地の方角に駆動する。

「こちらクローバー7、質問よろしいですか？」

「そら、我々の方が階級は下ですから、拒否権はありませんよ」

どうぞ、と眠そうに言った中年の通信手に、彼女は人知れず首を捻った。一応ブリタニア空軍中尉の階級章を与えられている女なのである。

「増援部隊について連絡はありましたか？」

書類については事前に話を通してあったので、通信機の前でガサガサと紙を手繰る音がした。指揮官の真似事をして日は経つものの、特に事務仕事は手が回らないこともあった。

「良い報告はありませんな」

「ストームウィッチーズは」

「手が回らないそうぞ。一応ロマーニャは新人の面倒を見るなら、とのことですがね」

蛇の威嚇するような音を立て、ついでにタリアは鼻で笑い飛ばした。

「つまり、まともな戦力を送る気はないってことですよね。まあ分かっていましたけど」

地上部隊、というか非魔女の部隊はそれなりに数があるので始末が悪いのだ。取り敢えず人員だけは居るように見える。現状どうにかなってしまうているので、激戦区でもない以上対応は遅れる。

しかも待ちに待って遂に先々月派遣された扶桑の新人など、初出勤初接敵からものの三分で機銃掃射を躲しきれず墜落、助ける間もなく砂に飲まれてしまった。思い返すに惜しいことをしたものだ。

化粧の影もない女らしい唇から陰鬱に吐息が漏れた。全体的に薄汚れて窶れた風体であつても、その仕草だけは不思議と様になつていた。

元々は自分など下端の一人でしかなかったというのに、上の者が次々と二階級特進を遂げたせいで、面倒を見る側になつてしまったのが何よりの悲劇だ。おまけにそのお陰で、この部隊の指揮官となつた者は死ぬという嫌なジンクスが出来上がつてしまった。自分はどんならうなるというのだ。

新人にしても上官にしても、勝手に死んでもらわれては面倒なのだ。結局こちらに皺寄せが来るのだ。ふざけるなど小一時間墓に文句を垂れたいところだが、中身がないことも多いので困る。

「コネでもあれば違いますかね」

「中尉殿がコネ作りに現場を離れられたら、まあ、お戻りになられる頃にはすっかり地均しされていきましょうよ」

自然と他人の肩に自分たちの命を載せてもらわないでいただきたいものである。このような小娘に何かと重荷を背負わせるのだから酒が欠かせないのだ。自覚してはいるがアルコール中毒寸前である。

タリアは適当に会話を切り上げ、冷えてきた手を擦り合わせた。この日のうちに襲撃があるとは考えていないようだったが、不毛な会話を続けても疲れるだけだということは万人共通の認識である。損耗し疲弊した部隊を更に窮地に追いやるのは、或いはこういった心理なのかもしれない。

彼女が欲するのは実戦経験のある航空歩兵三名。たったそれだけと思われるかもしれないが、世界情勢からして三名の熟練兵はあまりにも貴重である。

野砲が幾つ揃つていようとウィッチなくしてネウロイに対抗することは困難である。航空部隊が居たとして大した差はない。

故に部隊唯一のウィッチであるタリア・スミスは人類の矛として連

日全日戦い続けるより他がないのだ。戦うことへの忌避感がなからうとそのプレッシャーがどれほどのものか、一々語って聞かせるまでもなからう。

そのような経緯から飲酒を正当化して、彼女はスキットルのブランドーに口をつけた。科学的に述べるならば過度の寝酒は逆効果なのだが、既に帰投後の速やかな就寝にアルコールが欠かせない状態に陥っているのだから救えない。

「ああ、空で飲むお酒の美味しいことと言えば！ 生き返る気分だわ。死んでないけど」

酩酊状態になって冷静に（自覚する限りで）考えてみる。

このままで生き残ることができるのだろうか。難しいが無理ではないだろう。

一人でも魔女が居てくれたなら、少なくとも精神的な負担は軽減される。前回の新人として錬成を怠っていたわけではないが、尚の事慎重に扱えばやがて使い物になる時も来るだろう。昼夜問わずして自分が出撃しなくてはならないという現在の惨状も、何時か改善されるかもしれない。

どうせ手柄を立てても出世はできないのだ。ならば精々生き抜くことを第一に考えるべき——とは思う。それでもと思う部分はあるが、如何に。

朝日が昇る時間帯まで彼女は不気味な呟きを通信機に吹き込みながら考え続け、やがて格納庫に定時ぴったりに戻るなり、副官扱いの男に告げた。

「ロマーニヤの新人、育ててみましようか」

「おや、よろしいのですか？」

「考えが変わりました。軍務については皆さんに多少の負担をお願いしますが」

副官は鷹揚に頷いた。

「ええ、皆喜んで引き受けるでしょう。ところで酒臭いのは——ああ、分かりましたよ。何時に伺えば？」

無言で嫌そうに手を振ると、彼は嘆息と共に肩を竦めた。

「そうですね、仮眠は一時間で。どうにも歯ごたえがなかったですから、昼頃には陸戦型と一緒に来るかもしれません。最近はや報も外れるようになったらしいですし」

「……了解」

もう少し休ませてやりたい、という悔恨から副官は僅かに眉を寄せ、敬礼の姿勢を取った。そのあたりの考えは理解しているが、だからこそ口には出さず踵を返す。下手な気遣いは無神経にも優って人を不愉快にするものだ。

他の軍人のもものとは離れた位置にある自分のテントに潜り込む。ガラクタと酒、古びた戦術教本が放りっぱなしになっていた。注意する者は既に居ない。注意されても片付ける気はない。洗濯物は部下に洗わせているので大丈夫（時々風に飛ばされたといってズボンが紛失すること以外は）である。

ロクデナシだな、と無意識に零して彼女はベッドに身を投げた。誰に向けての言葉だったのか、知る者は居ない。恐らく彼女自身判然としてはいないのだ。

戦績だけを見れば華やかな部分もある。強力な個体との戦闘はなくとも、継続して防衛線を維持していると言えば評価の余地はあろう。

だとしても、だというのに、左目の眼帯も取らぬままに、胎児の如く手足を縮め込めたその寝姿は、非道く惨めだった。

少女来訪

上司であるという魔女は気の毒なほどに目の下にくまを作って、どこか遠くに意識を飛ばしているかのような有様だった。元の造形は悪くないのだろうが、これではただの呆けた変な女である。こんな状態で大丈夫なのかと不安になってしまった。自分が悪いのだろうか。「ええと、お嬢さん^{デイ}? カツサンドラ・レデイ少尉。聞いていますか?」

「はい! 失礼致しました!」

「まあいいけど、取り敢えず、歓迎しますよ」

妙に不機嫌な口調でスミス中尉はにこりともせず歓迎してくれなかった。らしい。どうにも表情が死んでいるので感情が籠っていないように見える。しかも口調も平坦で抑揚に乏しい。終始面倒くさそうに、時折欠伸すら漏らしている。

神経質そうに銀縁眼鏡を押し上げたのは、晴れてこの度タリア・スミスの部下となった、カツサンドラ・レデイ少尉である。新人ながらそれなりの階級が与えられるのは魔女の慣いであり、その上で士官教育を完了したからこそその地位である。

更に明白に言えば、カツサンドラは速成とはいえエリートの種類なのだ。

そう、一応エリートのはずなのだが、だとしていきなりアフリカの辺境に送られたというのは、如何なる不運のなせる御技か。

タリアは胡散臭そうに(彼女の視線こそ胡散臭さに満ち満ちていたが)カツサンドラを見遣ると、手元の書類を指で弾いた。

「すごいね、あんた。初勤務先でこんな場所に来させられるなんて、一体何やったの?」

「……それはご質問でしょうか」

「うん、まあ答えなくていいよ。大体分かっていますからね」

分かっているとされると、自分としても困るところがある。それでは黙った意味がないし、何となしに座りが悪い。

すると中尉は疲れたように腕組みをした。腕の上に脂肪が乗っているのが、その不健康な面構えと比べてしまうと奇妙だった。

「そうね、ここもアフリカの前線と言えなくはないし。こんなところに送られる理由なんて、将官お気に入り、教官に噛み付いたとか、それでよっぽど恨みを買ったとか、そんなもんでしよう」

「いえ、それは」

「まあいいや。別に聞いたところで何があるわけでもないし」

全く凶星であった。

しかし、ならば何故聞いたのだ。正直に言つてこの人の雰囲気は苦手だ。性格として合わないような気がしてならない。そもそも、公の場において髪すら整えていないというのはどういうことなのだ。服は皺だらけ、アイロンをかけろとまでは言わないがどうにかならないものか。

一度でも目がそういった部分に逸れてしまうと気が散って困る。顔も洗っていないように見えるし、階級章は薄汚れている。身嗜みの整っていない上官は部下を不安にさせるものだ。士官学校でもそう習った。

ところがなんだというのだ、この上官は。

ロマーニヤ人らしくもなく、カッサンドラは小姑のように眉間に皺を寄せた。例に漏れず見た目は整っているので有能な秘書のようにも見える。ただの新人少尉なのだが。

「あんた、本当にロマーニヤ人？ カールスラント人じゃなくて？

生まれるお国を間違えたの？」

「流石に失礼では？ 国籍による人格の違いは、あくまでも一般的な想像に基づく——」

ああもう分かった、とタリアは五月蠅そうに首を振った。同時に左遷させられるわけだ、と呟いて、肩を落とす。口煩い人間というのを心底面倒臭がっている仕草である。余程のこと世話焼きな人物に精神的外傷を負わされたと見える遣り取りであった。無論、間違いなく大層な理由などないに決まっている。

単純に、一々自分のやることに口出しをされることが気に食わない

のだろう。彼女がいくらか生真面目な性格をしているのなら、私室の惨状に説明がつかない。

どうやら新人と上司は全く噛み合わないらしいぞ、と周囲の男衆が戦々恐々とし始めた頃を見計らったように、タリアは肩を竦めた。

「兎に角、私があんたの上司になる、タリア・スミス。士官ってことは、それなりに訓練はしているだろうけど」

「私の成績に関しては書状をお持ちでは？」

「そりやあるけどね、うん。訓練と実戦は全然違うし、兎に角よ。これからひと月あんたは訓練だけに励みなさい。もし襲撃があつても弾薬の運搬以外許可しません。いい？」

命令です、と念を押されてしまえば反論など出来ない。軍人たるもの上官の命令は絶対遵守、これを蔑ろにすれば円滑な部隊の運営は困難となる。

終始嫌そうな、というかどこか面倒臭そうな顔をしているが、それでも上司は上司だ。やたら噛み付いても仕方がないし、そのお陰で砂だらけの太陽の下に放り出されたのだから多少は反省している。

少女はそのように内心で述懐しているが、たったの一分前につまらぬことでその直属の上官に威嚇してみせた彼女である。その素晴らしい反省が活かされることになるのは何時になることか。

或いは数年後にも一切の改善を見出さない可能性すら存在するが、ここで未来のことを語ったとて意味はなからう。来年の事を言えば鬼が笑うと扶桑の諺にあるが、彼女——ひいてはタリアを含めて、戦場に立つ者というのは戦士であれ、市民であれ、將軍であれ、老いも若きも例外なく、その日の晚餐にありつけないという運命の上に片足で立っている。

それは魔女であつても同じことである。だからこそその、タリアの判断であろう。

漸く配属された新人を初陣で戦死させてしまったという悔恨も、そこには影響を及ぼしているのかもしれない。

「まあ、奴さんの砲撃を防ぐくらいならやってくれないけど、無理はしない。戦闘は絶対に駄目。飛行脚の訓練がしたいなら、最低で

も前日には私か、この副官さんに話を通して頂戴」

後方に控える紳士を指してから質問は、と尋ねたタリアに、カツサンドラはありません、と簡潔に答えた。

タリアは少しばかり満足げに頷くと、大きく息を吐いて男衆の方に手招きをして、岩のような顔をした男を呼び寄せた。

「では、後はこちらの軍曹さんに案内してもらいなさい。私はこれで」
「はっ。……は？」

「いや、私、この部隊の指揮官ね。書類が山のように待っているのよ。つまり残念だけど、案内をしてあげられるほどのヒマがない。そういうこと」

そう言うなり、形だけの適当な敬礼を残して、顔色の悪い上司は司令部という立て看板の打ち込まれたテントに引っ込んでしまった。

思わず直立不動の岩男に目線を送ってしまう。

無言で彼は首を縦に振った。頷かれても困る。

「ええと、軍曹ですか。それでは案内をお願いしても？」

元気よく四十ほど見える男性は首肯する。それは良いのだが、何故口に出して話してくれないのだろうか。

部下との会話も士官にとっては重要な仕事である。気楽な会話によつて彼らにかかる重圧を緩和し、時には叱咤することによつて規律を正す。軍曹の階級章を付けているということはこの男、恐らく^{ヴェテラン}熟練兵である。叩き上げの兵を軽視する程戦場での寿命を縮めることはない、と口を酸っぱくして教え込まれたものだ。

さりとて何も言われないのではどうしようもない。

はてどうしたものか、とカツサンドラが首を捻ると、男は頬を掻いて呻くように口を開いた。

「その、申し訳ありません。どう言ったものか、本国に置いてきた娘がちやうど……」

「ああ、私くらいだと。そこまで畏まられなくてもよろしいですよ。私は何の経験もない新人ですから」

事実として、軍属となった魔女の平均年齢は非常に低い。ローマニヤ軍においては十二歳という異常なまでの若年で活躍をする者ま

で居るのだ。それが良いこととは、誰とて考えてはいないだろう。一番の問題とは、その反倫理的な選択すらも許容せざるを得ないほどに疲弊した人類の現実である。

この日アフリカの零細部隊に配属されたこの少女とて、外見のみならず年齢という部分でもその例に従っている。齢にして十五、現状における軍属魔女の新人として、若過ぎると言われることはないだろう。

然れども、十五なのだ。娘のいる兵としては本来学校に通っているべき年齢であるということ直視せざるを得ないだろう。

案内された各設備は中々のものだった。全く中々のものであり、汗で眼鏡がずり落ちてきていることにも気が付かなかった。ローマーニヤから遠路はるばるやってきてみれば飲み水にも困る有様である。こんなことならば、少しばかり賭博をやっていただけの教官に文句を言うべきではなかったかもしれない。

このようなところに送られて初めて自身の行為に後悔することになる。あまり嬉しいことではないが、言ってしまうということもない。

志願して成績トップで士官教育を終えてみれば、性格が災いしてこの現状、笑うに笑えない。笑い飛ばせたならまだしも、出世コースからは大きく逸れているので脱力することこの上ないのだ。

「そのご様子だと、我らが基地はお気に召さなかったようですね」

「い、いえ……」

「いいですよ、事実ですから」

落胆する様子に見かねてか、軍曹はそう言っただけで苦笑した。基地の案内を受ける内に幾らか表情が柔らかくなり、冗談すらも飛ばしてくれようになっていた。良い傾向である。ひとまず彼からでも打ち解けることができれば幸先は良いものとしていいだろう。そう信じた

い。
当然、面と向かってここまでひどいとは思っていなかった、などとは言えないのでどう返したものか。

反応に困ったカツサンドラが意味を成さない声を漏らしていると、

男は給水所から汲んできた水を手渡しして無精髭の伸びた顎を親指で
ごりごりと擦った。

「いや、この通りですがね、大丈夫。これでも兵の練度は高いですか
ら」

「確かに動きが良いように見えます」

「そりゃあよかった。ぜひ連中に直接言つてやっってくださいな。どい
つもこいつも美人が来たつて騒いでおりますよ」

見た目が他人よりも優れていることは自覚しているが、それでも正
面から美人と言われると照れる。下士官と馴れ合うことは避けたい
が、今度時間の空いたときにでも訓練の場に顔を出すのも良いだろ
う。

そう考えていると、つい思い出してしまった。自分は訓練以外の行
動について許可を受けていない。顔を出すもなにもあつたものでは
ないわけだ。

新人であるので、それは腕前を信用されないのは当然である。だ
が、だとして、戦闘への参加を全面的に禁ずるとするのは、やりすぎ
ではなからうか。士官学校での成績は一切の虚偽を含まず最善と言
えるものだったのだ。

どうだろうか、と尋ねてみる。

「それはまあ、仕方のないことで」

「……ですか」

「新人とは言え、いや失礼。貴重な戦力を浪費することは認められな
いのです。大丈夫、ひと月は我々が出来る限り支援しますから」

「あの中尉殿は？」

カツサンドラの質問に、軍曹は言葉に詰まって額を掻いた。

彼が迷った末に何らかの言語を形成した時、より正しくは声を発そ
うとした、まさにその時けたたましい警報音が基地に鳴り響いた。

それが敵襲の合図であるとかツサンドラが気付いたのは、傍らの軍
曹がその細い手を引いたからである。細かいことではあるが、得てし
てそういった些細な部分で経験の有無というものは露呈する。現場
においてはそれが弾倉の入れ替え、照準の精度、即ち致命的な要素と

成り得るのだ。

奇しくも、言い換えれば予定調和的にカツサンドラ・レディは自身の経験の浅いことを証明した。過失ではなく純粋な経験期間の不足である。

空気に慣れる。ただ言葉にしてしまえばそれだけのこと。

単にそれのみが悪戯をして残酷な結果を招くことすらある。それ故の不参戦の強制であった。

「少尉、弾薬を！」

「は、はい！」

部下に呼びかけられて命令を思い出す。なんたる失態か。たった一つ、弾薬・砲弾を運ぶというだけの指令を警報の音で吹き飛ばされていた。

恥じる暇はない。走らねばならぬ。魔女の腕力は普遍的な人類のものよりも大きく優っている。如何に不満であろうと単純な任務程度がこなせないと判断されたなら、もはや自分の立場は絶望的だ。

カツサンドラの不安は完膚なきまでにずれていた。換言しよう。彼女の認識は典型的な現場を知らぬ士官の思考そのものであった。

ネウロイに関わる戦線に身を置く者は口を揃えてこう言うことだろう。

戦場に単純な命令が転がっていることは珍しくもない。しかし楽な任務を探すとしたら、それは青い薔薇を探すのと同じだ——と。

——酷かった。

掘り進められた塹壕で迷い、砲弾の口径を間違えて怒鳴りつけられ（この部隊はブリタニア・カールスラント・ロマーニヤ各軍を混合した編成である。つまりそれぞれの砲に適合する弾頭を、配置を覚えた上で運搬する必要があった）、吹き飛ぶ土砂を滲む汗で貼りつけながら走り回る。控えめに言っても地獄だった。

士官学校時代走り込みを欠かすことはなかった。当然成績も優の一字だ。

そんなものは毛ほどの意味もなさなのだ、よくよく理解した。地面が砂なので塹壕とは言っても、何度も補修されて使われている

のだ。崩れた箇所を通過し、砲撃から身を隠すには中腰で走り続けねばならず、真つ直ぐと立って走ることを贅沢とすら考えさせられた。シールドで防御するくらいなら、と言われたがそのような余裕はなかったのだ。

どこが崩れたのか、どこに弾薬が必要なのか。それを把握するだけで精一杯で、負傷者を運び出す手伝いすらも満足に行えなかった。だけど、とカツサンドラは夕焼けの沈むテント郡の端で勝手に頷いた。

生き残ることはできた。

初めての戦場を、それでも。

空を飛ぶことはなかったが、死なずに済んだのだ。

勘違いされがちなことであるが、魔女の場合も初陣で墜落し、還らぬ者となることは間々ある。一般兵と比べると圧倒的にその確率は低い、十分な支援をなくして生き抜いたケースはそう多いものではない。

新兵の死亡率が必ずしも高くなるか、という問題はさておいて、魔女は万能ではないのだ。

結論から言うに、戦力の不足する部隊においては錬成の期間を短く想定せざるを得ない。したがってそこに配属される新人は、満足なバックアップが確保出来ないままに戦場へと送り出されることとなる。よって死に易い。

大戦初期、ネウロイへの効果的な戦術を模索する中で、相応の数の魔女が犠牲になったことは覆し難い過去である。

カツサンドラが生き残ったことを喜ぶのは自然なことであるとも言えよう。

「——やっと思つけた。こんなところで何を？ 怪我でもした？」

「あ、中尉。いえ、怪我はありません」

「そ。ならいいけど。ヒマならついて来て。今日の報告をしてもらわないと困るから」

唐突に姿を現した中尉は目立って負傷した様子がなかった。これまで彼女一人でこのラインを支えてきたというのだから、見た目に反

して腕は立つのだろう。

散々この部隊について面白可笑しい噂を聞かされて来たので、今回の襲撃を速やかに対処してみせたことには驚いた。実情は伝聞とは異なるものらしい。

司令室代わりのテントに入ると、タリアは椅子に倒れこみ、足を組んで鼻を鳴らした。

「どうだった？ 弾運びくらいならどうにかなる？」

「苦戦はしましたが」

中尉は手に持っていた麻袋を天板に置き、パイプに火を入れた。紫煙が渦巻き少々むせる。これくらいのことでも文句を言っても何にもならないだろう。喫煙者が上司ならば、諦めた方が賢明である。こればかりは良いも悪いもない。

「それは何より。じゃ、明日は早めにここに顔を出しなさい。作戦地図があるから、午前中には内容を全部頭に叩き込むこと。それが終わったら塹壕の補修を手伝って」

「あの、訓練だけでは……」

「塹壕を直す訓練。出来るだけ部下の顔と名前を覚えるように。ああ、それと……各部署の担当者から今日の被害報告と不足する物資に関する報告書を受け取ってきなさい」

「了解です。しかしそれは」

その担当者の仕事ではないのか、とカツサンドラが口に出す前に、タリアは強い語調で続けた。

「私はあんたに命令したの。と言っても、明日報告書が上がるわけがないからね。急がなくてもいい。ただし、必ずあんたが受け取って私に渡すこと。分かった、お嬢さん^{デイ}？」

「……了解しました」

無然とした様子でカツサンドラは敬礼の格好をした。敬意が籠っているとは到底考えられない表情であったが、彼女の上司は何も言わずに机に体重をあずけて引っぱり出した書類をやっつけ始めた。

解散とは言われていないが、帰ってもよいはずだ。これで叱られたのなら流石に怒る。

しかし明日も忙しくなるようだ。どうも何が何でも自分を使いたいらしい。この状態でまさかストライカーの訓練がしたい、と言えるほど冒険家ではない。

それに部下の名前を覚えろというのは、命令されたことというだけのもので済ませるべきではないだろう。先を見通しての指導とも受け取れる。

あの軍曹に力を借りるのも良い手だろう。

「自分でやりなさい」

「え、今日案内をしてくださった軍曹に紹介していただく、というのは駄目でしょうか」

「駄目というか、無理。彼、死んだよ」

硬直した少女の目の前で隻眼の魔女は麻袋の中身をひっくり返した。

流れ落ちる金属、鎖を通された鋼の板である。

俗に言うドツグタグであった。

「いい、もし砲撃が避けられないと思ったら上半身だけでも逃がして。大型の砲撃なんてまともに食らったら、このドツグタグも無事で済まないかもしれない。まあ……連中は金属を食うから結局賭けになるけど」

自陣近くで砲撃をするならば間に合う可能性は高かろう。

だが魔女の戦場は空である。墜ちた死体がどのようなになるか、と彼女は説明しているのだ。その二つの条件の下でもし発見が遅れたなら、最悪認識票すら回収出来ない。

彼女らは地上だからまだ良い。海上で無防備なままで砲撃を食らった場合、運良く味方が付近に居て、運良く命が助かったならば別だが、基本的に回収は不可能と言える。

死んだのか。ごつい顔に似合わず愛想の良い人だった。

たったの一時間しか会話をしていないのに善人だろうと思えた。

それがこうも呆気なく死ぬものなのか。

言葉を失った少女に何を思ってたか、タリアは頬杖を突いたままペンを取った。

「今日はもうお休み。初日から運が悪かったね、少尉」

自分のテントの位置はどうか覚えていたらしい。昼間軍曹に案内してもらったのだ。何を考えているのかもわからないというのに、足はきちんと歩いてくれた。

情報だけでは理解していた。数値だけなら記憶していた。

人が死ぬのだ。善人も死ぬのだ。奥方が居て、自分と同じくらいの年頃の娘がいる男も死んだ。

ベッドは固く、寝心地は悪そうだった。であつても不思議と毛布をかぶれば暖かく、逆に冷え切った心根がきつく心臓を絞り上げているように感じた。

自分は生き残ったのではない。死ぬ場所に居なかつただけなのだ。

戦闘が終わった時に生きていたというだけだった。

浅く苦しい睡眠からカツサンドラを叩き起こしたのは軍隊お馴染みの起床喇叭であつた。時間は傷を癒すが、睡眠不足の者にとっては残酷である。

駆け回る日々

砂を掘る。散々掘り続ける。延々と掘り進む。掘っては固め、掬った砂を麻袋に流し込み、数を数えるのが嫌になるほどにその作業を繰り返す。土嚢を積み上げる工程もあるのだから、時間を考えないようにする。炎天下、むさ苦しい男衆に混ざって従事する肉体労働は体力以上に気力を削ってくれた。

上司の言うことにやたらと反発するのは愚策である。だが敢えて、心の中でだけでもこう言わせていただきたい。年増中尉よ、早く指揮権を私に寄越せ。

思想は自由なのだ。口にさえ出さなければそれで済む。あの女が何を言おうものか。口の中で言葉を燻らせていては知る由もあるまい。

誰にも文句など言わせるものか。遙々こんな僻地に来て何をするのかと思えば、もう二週間も塹壕を掘らされている。機械化航空歩兵とはなんだったのか。これではただの歩兵である。塹壕の整備と増築が重要であることは承知していても腹立たしい。

魔女とは何時から塹壕掘りの代名詞となったのだ。

そこには士官であるはずの自身がどうして二等兵がやるような仕事をさせられるのか、という憤りも含まれているに違いない。カツサンドラの表情はとてつもなく不機嫌なものだった。やたらしかめ面になっているわけでもないが、すっかり不貞腐れた御様子である。

彼女が事前に予想したところでは、恐らく辺境の基地に送られ、新人ながらも訓練生として最優秀とも言える成績を残した自分がそれなりに活躍して、順調に隊員や部下に認められていくことになっていたのだらうか。否、そこまで楽観的ではないにせよ、それなりに良い待遇を期待していたのは確かであろう。

ところが蓋を開けてみれば飛行脚の訓練すらままならず（配属以降一度のみ、しかも単なる基礎の復習）、只々豎穴を作り続ける日々である。悲しいが、未だカツサンドラ・レディは十五の娘である。不平不

満は寧ろ必然、忠実に士官学校で学んでいたからこそ惨めさが増すのだ。

射撃も飛行脚による機動の訓練も、まさか戦地において円匙シヤベルで穴を掘る為に行われたものではなからう。毎日のように土砂を切り崩し、土嚢を積み上げ、時として補強の木組みすら組み立てさせられる彼女の手のひらには、肉刺マクメの出来る段階を超えて（肉刺は潰れていた）硬いたこが形成されつつあった。

しかもそれに準ずるが如く、神経質でしかなかった少女の表情もまた——堅く苛々としたものへと変わっていたのだ。一般兵の心労たるや、推し量るまでもない。軍隊というものは部下の下には部下が居り、更にその下には経験の多寡が地位として存在するものなのである。要するに割を食うのはいつも下端である。

そこで切羽詰まった雰囲気の若い兵士がカツサンドラの煤けた背に声をかけた。

「少尉、こちらは我らがやっておきましょう。一度休憩を挟まれては？」

「何を言われますか。私は中尉殿、ええ、そうですね。タリア・スミス中尉のご命令を受けて掘っているのですよ。勝手に休むことなど」

「い、いえ。あともう少しですので、我々にも仕事を残していただきたいのです」

真に控えめな二等兵の言い分であるが、その裏に機嫌が悪い新人士官に近くについて欲しくないという理由があることは今更言及するまでもない。

ただし、兵卒の内誰が新人士官に進言するのかという尊い闘争があったことは明記すべきであろう。晩の安酒が勇者への報酬である。対価としては些か安価が過ぎるが、それも不運の一言で済まされるのは悲劇だろうか。

そこまで言われてしまえば居座るのも心地が悪い。自分の仕事はまだ他にもある。正確には他にも命令を受けている。これ以上円匙を触っていなくて済むのならば、少しは心が晴れるというものだ。

ではお願いしますね、とだけ頼んでおいて高い壁を乗り越える。普

通の歩兵はほぼ例外なく男性であり、その背丈に合わせて作られた塹壕は自分にとって少々深過ぎた。女性としては平均的な身長なので当然である。

さて、果たして貴重な航空歩兵戦力をこのように用いるべきか否か。

こういった疑問に対する答えは、この隊の場合、是である。

魔女の膂力というのはその魔力の許す限り一般成人男性のそれに大きく優る。彼女らが戦場で振り回す銃火器には非魔女にとって持ち上げることすら困難なものも多い。長期に渡る作業によつて徒に兵の体力を消耗させることと、一人の新人を不機嫌にすること、どちらを取るのかという問題となれば自ずと答えは出る。

これが戦闘経験のある、言い換えるのならば使える魔女だったのならば、或いは話が異なってくることもあるだろう。だが、カツサンドラ・レディという魔女を例にとつた場合には——本人としては不本意だろうが——後者を選択した判断こそが正しいものと言えよう。

「済みません、前回の戦闘の報告書を」

「ああ、出ていますよ。その机の上です」

整備班の班長がスパナで指した作業台の上に、雑な字で書かれた書類は工具箱を重石に放られていた。その場で記入漏れがないか内容を確認する。

この二週間で昼間の襲撃は三回、夜間の襲撃が二回発生したのだが、その都度の報告書に不備が発見されると自分が確認に走らされた。どのような形であれ部下からの書類を受理した時点で、その書類に対する責任は自らが負うことになってしまう。逆に言えば上司に上手く責任を擦り付けることも出来、それを知っているから中尉は自分を走らせたのだろう。それは理解しているが、穴掘りをした後で同じ道を往復するのは気分がよろしくない。休憩に入った班長を引っぱり出すのもバツが悪かった。よつて今は現場で念入りに（一度不注意による確認漏れがあった）確かめるようにしている。

「はい、大丈夫です。確かに受け取りました」

「ええ、お疲れ様ですな、毎回大変でしょうに」

「これも任務ですから……はい」

班長は少女の不貞腐れたような表情に、頬を太い指で搔いて口に出すべき言葉を誤魔化した。荒くれ者どもを纏める者であつても年頃の少女には弱い。常日頃の男所帯が、時折の少女との会話に苦手意識を植え付けてしまったのだ。

ちなみに整備班は主にカールスラント軍の兵で構成されていた。言わずもがな、ロマーニヤの男どもではこのような可愛らしい反応など望めない。軍属の魔女が入隊時より高い階級にありつけるのは彼らの輝かしき活躍のお陰でもある。

余談であるが、タリアのロマーニヤ人に向ける偏見というのは、そのあたりの事情が大きく影響を与えている。具体的なロマーニヤ紳士たちの行いについては、紛失したタリアのズボンが彼らの背囊の底に敷かれているのかもしれない、とだけ言及しておく。

司令室は薄暗く、いつも通り煙草の煙で霞が掛かっていた。自分が入室する際には必ず一つ二つ咳き込んでしまう。どうしてこのような臭いが好きになれるのか分からない。そればかりか、旨いとまで口に出すその神経は理解不能である。そんなに煙を吐きたいのなら蒸気機関車の煙突にでも顔を突っ込めばいいだろうに。

「報告書をお持ちしました」

「はいご苦労。……うん、よろしい。あら、塹壕の方はどうしたの」
部下に休むように言われてしまって、と事情を話すと、中尉は小さく頷いた。

「そう。なら物資の方に行ってもらいましょうか」

「だ、弾薬箱ですか」

「ううん、箱の弾倉に弾詰めておいて。訊けば分かるから。それから飛行脚はいいけど……あんだの銃、きちんと整備しておきなさい。使う時に使えないじゃ、お話にならないでしょ」

またも雑用である。つい口を突いて出そうな文句を飲み込む。ここは軍なのだ。士官学校ではない。それに、確かに武器の整備はしないといけないと思い始めていたところだった。どうせ残り二週間は使う機会もないのだが、モノがモノなので念入りに磨いておかないと

何が起こるか分からない。常在戦場、腹は立つが彼女の言うことは正しい。

「了解しました」

「はいはい、それじゃ駆け足。時間は有限だよ」

「——ところで中尉殿は今何を？」

「あんたが聞いてどうするのよ」

「ごもつともである。」

何となく意趣返しのもりで尋ねてみたが見事な迎撃を受けた。自分が彼女の仕事を教えられたところで何にもならない。幼稚だった。上司の机にある冷めたコーヒーを見れば察しがつこうものである。自分が砂と格闘している中、彼女は襲い来る書類の山と揉み合っていたのだ。

事務仕事というのは得てして軽視されがちである。それは勇ましい武勇伝と程遠く、地味で、一見して机と睨めっこをしているだけとも思われるからだ。飽くまでもそれは一般的な固定観念である。士官がその認識で居てはならない。事務方の業務なくして弾薬は前線に届かず、兵は飢え、そして必敗が待つのみである。文句を言いたくなることは多いが、それでも重要な仕事をしていることは理解している。

短気な新人少尉はそうしてどうにか自身の不満に決着を付け、はて、とコーヒーマシンの脇にある注射器に目を留めた。それ自体は何の変哲もない医療器具に過ぎないが、上官の机の上に鎮座している理由がない。

「これ欲しいの？ どうしても欲しいなら余りはあるけど、オススメはしないよ」

「あの、何の薬ですか？」

「うん？ ああ、これは元気の出るお薬」

「はあ……栄養剤か何かですか？」

違うけどとも元気の出るお薬、とタリアは空の注射容器をくずかごに放り投げた。その表情は何処か後ろめたく、何時にも増して疲れたような影が見られる。

カツサンドラの疑問に対して答える気はないらしく、彼女は不味そうにコーヒ―を喉に流し込んで頬杖を突いた。半開きの片方だけの瞳が言外に部下を追い出そうと湿気を含んでいる。

どうやら藪蛇だったらしい。これ以上機嫌を損ねても面倒なので、敬礼をしてからテントを後にする。薬に関しては噂に聞くシロモノなのかもしれないが、自分が口出しをする問題ではなかった。個人の意思で使用しているのなら介入すべきではないだろう。中尉に噛み付く程度ならばまだしも、モントゴメリー将軍に喧嘩を売るつもりはない。

大体、今のところ週に一回は兵舎から大麻の臭いがしているのだ。どうして抗議など出来ようものか。大いに気に入らないが。

忙しなく眼鏡の位置を直しながらカツサンドラは頭を振った。一度割り切ったはずの物事が延々と頭蓋に渦巻くのが彼女の癖らしい。軍人らしいきびきびとした歩調で、そして少女らしいちまちまとした歩幅で倉庫へと突入してきたカツサンドラを兵は生暖かい視線で出迎えた。彼らにとってカツサンドラは女性の範疇にあり、タリアは若干その範囲から外れつつある。

銃口から手早く分解してしまう。そのまま鉄クズ入れにでも放り込みたかった。成程、どうやら自分は送り出してくれた教官殿に随分と嫌われていたようだ。分かっていたが思っていた以上に煩く思われていたらしい。

幾らなんでもM30はないだろう。ブレダM30、言わずと知れた砂漠における最悪の軽機関銃である。百歩譲って威力の貧弱さは我慢するとして。自分がネウロイの弱点にまとめて当てることが出来ればどうにかなる範囲だ。

だが汚れに弱く、耐久性も低く、連射速度も低く、装填が面倒で、その上肝心の精度までもが悪いとなれば手の施しようもない。わざわざ陸の方に手を回してまで新品を送りつけてくれたのだから涙が出る。クリスマスカードは添えられていなかったが、「くたばれ」と仰っているのだ。

大きく溜息を吐いて少女は油で磨いてやった機関銃を組み立てた。

押せば折れそうな可哀想な銃はゴミ箱行きを免れたらしい。

カッサンドラの手が頼まれていた弾薬と空の弾倉を机の元に運んだ瞬間、彼女は愕然とした。

——ローダーがない。全て手作業で弾を込めろというのか。

弾倉の多くは強いバネで弾を本体に送り込む構造となっている。

よって弾をそこに押し込むにはそれなりの力が必要である。

そして木箱には種類別に分けられた弾倉が、どう見ても数十は整列している。

M30は挿弾子クリップによって固定弾倉に弾を補充するという仕組みである。こうなっていると単なる劣等生が心優しく思えてくるのだから不思議である。泣きたい。

「——ああ、お嬢さんレイ、頑張っていますね」

「中尉……どうされましたか？」

タリアが半泣きになったカッサンドラの元を訪れたのは、哀れな新人が指で弾を込め始めて一時間が経過した頃であった。三分の二ほどの作業が終わった光景を見て、彼女は少々の間居心地が悪そうに視線を彷徨させた。

「あの、何か」

「ごめん。ローダー、作業着のポケットに入れたままだった」

「……中尉殿。弾倉の耐久性を実験したいのですが、よろしいでしょうか？ ええ、有事に備えて人体への投擲を想定して」

「うん、本当にごめん。代わりに明日、飛行脚の訓練に付き合うからさ……よし、仕方ない。黄の14、マルセイユのプロマイドもつけちゃおう。どう？」

中尉が盾にするように掲げたのは、自分の持っていないアフリカの星の写真であった。出回っているものと比べると気持ち幼いように見える。それだけ希少価値が高いということだ。

何を隠そう、自分もファンなのだ。自慢だが彼女の名前はフルネームで言える。ハンナ・ユステイナー・ヴァーリア・ロザリンド・ジークリンデ・マルセイユ。ファンを名乗るならばこの程度のこととは出来て当然である。

受け取ったブロマイドを大事に手帳に挟み込み、懐にしまう。

新人士官が賄賂という文化を学んだ感動的なシーンであった。上官からの直伝である。なんと貴重な体験だろうか。

「ま、まあ仕方ないですね。物忘れは誰にでもありますから」

「なら良かった。ついでに言い忘れていたけど、武器はあるものを好きに使っていいからね。あんなもん倉庫の隅にでも置いときなさい」
「中尉……」

そのような大事なことは先に言っておいてもらいたかった。だがあのでこすり銃を使わずに済むというならこれ以上のことはない。許可してくれるのだ。存分に使わせてもらおうとしよう。

きちんと良い（マシな）装備を回してくれる上司なのだ。何だかんだでこの中尉も意地が悪く、無愛想で、服装はだらしなく、説明を忘れるはするが、悪い人間ではないのかもしれない。

カッサンドラは他人のことを言えたものではないその仏頂面を緩めて、極めて正直かつ率直な礼の言葉を述べた。この時少女はタリア^上とブレダ^劣M30^等とを殆ど同様に解釈してみせていたのだが、本人は気付いているのだろうか。

「私、この隊に来て始めて中尉に感謝しました！　ありがとうございます
ます」

「あんたね、そんなことを言うからここにいるのよ？　お分かり？」

タリアは口をへの字に曲げた。

経験と年齢

偏差射撃は空戦を行う上で必須とも言える技術である。

敵機の機動を先読みし、軌道を塞ぐ様に弾丸を配置する。違う表現を用いるのならば、相手が自ら攻撃に当たりに行く形を作るといふことである。

当然その実行には高度な空戦技術、的確な戦況判断——例えば三次元的空間把握などの技能が求められる。そして技能とは別として経験が生来の才能を補強する。なおこの場合の経験とは訓練、模擬戦、そして実戦、それらを複合的に解釈したものとす。

手にした火器の特性、実際の運用、精神の作用。ここに列挙しかねる多くの要素を教本や製品情報のみにて補完することは、概ね不可能であると考えてもよい。

さて、では何故このような基礎知識を述べているのか。

その答えは模擬戦を五回ほど行った二人の魔女が示している。

「じゃ、一旦休憩。水飲みなさい」

「……了解」

軽々とスレッジハンマーを肩に担ぐタリアと、息を切らして千切れた紙帯を握ったカツサンドラの姿は対照的であった。新入士官が肩紐でペイントガンを吊っていることから、上司が制限を設けて模擬戦に臨んでいたことは明らかである。

新人の戦闘技能は、決して悪いものではなかった。実戦経験がないという前提においては及第点を付けてやってもいい。何よりも基本に忠実。兎に角教本の通りに動く。自分は面倒で絶対にやろうとは思わない程の堅実な機動も、別に悪いことではない。

勇猛果敢、大いに結構。だがそのお陰で簡単に死んでいただくのは困る。飛行脚に余裕があるのは事実だ。かといって無闇矢鱈と壊されては堪らない。人も物資も有限なれば、無駄な消費は困るのだ。

その意味でお嬢さんの技術は悪くない。経費削減、物資節約。人命も貴重な資源なのだ。前回の新人と違って消極的に戦おうという姿

勢は評価できる。

少々表立たない話をする。

ここでタリアはカツサンドラの慎重な戦闘傾向を良いものと考えている。ともすれば物資云々という件は、彼女なりの一種の照れ隠しであるというようにも受け取られるだろう。優しい性根を隠して敢えて冷たい態度を取る。魅力的ではある。

然れども、実際にカツサンドラ・レディは物資なのである。

彼女が配属されるまでのこの部隊に魔女は一人しかいなかった。ブリタニア所属のタリア・スミス中尉である。期間限定でそうではなかったこともあったが、親愛なる中尉殿が指揮を執るようになって以降、凡そ所属する魔女は一人でしかなかったのだ。

一般兵の使うライフルや野砲の弾薬は人数の多さに伴って、少ないながらもそれ相応の量が送られていた。つまり同様に、魔女向けの物資も相応の量でしかなかったのである。嘗て部隊に所属していた魔女たちの置き土産があるにしても、余りに心もとない量であった。

しかしこの度カツサンドラがロマーニヤ軍から派遣されてきた。それは上層部に物資を要求する根拠となる。弾薬のみならず、食料や医療用品といった直接的な打撃力に該当しないものまでを手繰り寄せる材料となるのだ。

魔女の命は重い。非魔女の兵と比べると格段に、である。命の価値を論ずることが傲慢という者もあるだろうが、原則軍を情で動かす程愚かしいことはない。重要な戦力を生かす為なら多少の融通を利かせることもある。

ただし、この時は善意によって融通を利かせたというよりも、一方的にロマーニヤから恩を売られる格好になることを防ぐ為という意味合いが強い。新人とは言えロマーニヤの士官学校でトップの成績を誇った魔女を派遣させた拳句、ブリタニア軍所属の指揮官がそれを死なせたとあっては座りが悪いのだ。

したがってブリタニアを始めとする他の国は表面的だとしても支援を行い、最低限便宜を図った形を採る。そうしなくては戦後が怖い。

戦争とは往々にして戦前に結果が決まり、戦後にこそ成果を得る。何が相手だろうとその真実は普遍にして不変である。

幸いにしてそれ故に、レディの存在は物資と等号で結ばれるのである。

そして不幸にして哀しいことだが、自分は過去に少ない配給でどうにかやってしまった。追加物資を必要とする根拠をなくしてしまっていたのだ。そのせいで配給が少ないのだ。

きつと、毎度厭味たつぷりの陳情書を本部に送りつけてやったこととは関係ないだろう。「潤沢な補給のお陰で以前は扶桑の新人がたった一人墜ちただけで済みました」などと書いてしまったのかもしれないが、何分二ヶ月程前のことなので定かではない。恐らくそんなことは書いていないはずだ。

「どうして当たらないのよ……」

「やりたいことを表に出しすぎ。あと上官には敬語。徹底しておきなさい」

水筒を一本空にしたカツサンドラは大仰な仕草で項垂れた。圧倒的なまでの実力差を直視させられたのだ。年月を経た者が必ずしも若者より上を行くわけではない。然れども、今回の模擬戦においては、その経験の差があり過ぎた。

基本的に模擬戦はペイントガン等で行うものである。

語るにも残念なことだが、それは余裕がある基地だからできることだ。考えるだけで鬱々とした気分にはさせられる。この部隊にその様な上等なものはひとつしかない。新人の訓練である以上自分が使うわけにもいかないだろう。

よって扶桑人が行うという、細く切った紙を括り付け、それを標的として近接武装で狙う方式を採用した。敵戦力によつては自分も鉄槌を用いるので苦でもない。

結果が五戦五勝、圧勝である。嬉しくもない。

正直過ぎるのだ、この新人は。思ったことをそのまま実行してしまう癖がある。当たらないと思えば当たるように露骨な誘導を始めるし、太陽を背にしようという動きがあれば律儀に阻止しようとして上

昇する。

そこに射撃精度の粗さが加わってしまうのだからご愁傷様というものだ。

間違つてはいないが、どういったものか。純粹である。否、単純である。未熟以前の性格としての問題だろう。

何しろ、フェイントというフェイント全てに引つかかってみせるのだ。そんな調子なのだから、三戦目以降など柄にもなく嗜虐的に追い詰めてしまった。とても楽しかった。新人イジメは上官の特権である。

性格の悪さを捻じ曲がった笑顔に表し、タリアは首をゆっくりと回した。枯れ木を手折るような音が鳴る。続く溜息が年寄り臭さを強調してしまっていた。外見が悪いわけではないのだが、この女の挙動というのは一々倦怠感に溢れている。

大体ですね、と自棄になったカツサンドラが唇を尖らせた。

「何でそんなもの使っておられるのですか！」

「剣が折れたから持ち替えただけですよ」

「いや、それ以前に何でそんなものが……」

実家が鍛冶屋なのよ、とタリア・スミスは細葉巻シガレットに火を付けた。愛煙家の割には銘柄に拘らないようだ。この日はリベリオン製の安物である。味が分かるだけの味覚が残っていないのか、美味い、と彼女はぎらつく太陽に向けて煙を吹きかけた。心底忌々しいとでも言いたげな面である。

カツサンドラが咳き込んでも、涙目で何かを訴えても、部下を弄つて上機嫌な中尉殿は気付かぬふりを貫いた。新人の口煩いことについてはそれなりにストレスを溜めていたようだ。それにしても意地が悪い。

赴任してきた頃から思っていたのだが、この新人は上官に対する敬意が足りない。自分がどれだけ敬われるべきものかと思えば仕方がないのかもしれないが、何時までも嫌々働かれては敵わない。

勤務態度も評価の項目である。部下を動かす地位に居る者が、気に入らない任務に不貞腐れて噛み付くようなことでは拙かろう。命じ

られたことをやっていけばいいというものでもないのだ。

上司への円滑な対応、兵への働きかけ、それらは最早必須といっても良い能力である。部隊運用と士気の高揚、いずれも極めて重大な職務である。

自らを正当化する為に必死になるのもまた、場末の戦場によくありがちな上官の有り様である。指揮官にあるまじきタンクトップ姿でよく言えたものだ。

「ま、これで少しは私を敬いたくなっただでしょう」

「え、あ、はい」

「あんたね……もういいや」

上官侮辱罪を発動してもよいのではないか、などと考えながらタリアは高度を下げた。彼女の足を覆うハリケーンが湿気た駆動音を鳴らす。

敢えての選択であった。古い飛行脚は部品が手に入りやすい。砂塵によって故障が起き易いアフリカにおいては、単純な機動性能よりも整備性の方を重視するウィッチも多いのだ。

模擬戦と訓練の終了を悟ったカツサンドラもその下降に付き従う。彼女の足に装着されている飛行脚も旧式のフレッチャである。部隊の予算が心配される布陣だった。

「——さて」

注文は多いが、この新人にも物資以外の面で助けられることはある。

というよりも助けられている、と言うべきか。

二人が地上に戻ったのはアフタヌーンティーを堪能しようかという頃合であった。

タリアの右目が部下を怒鳴りつけているカツサンドラの方に動く。少女はロマーニヤ兵の顔を声で威嚇しているようにも見える。タリアは実際そうなのだろう、と考えていた。

カツサンドラは整備場を出たところで洗濯物に手を伸ばしている男どもに目を留めたのだ。その手の行先には一枚のズボンが爽やかな風にはためいていた。男所帯の軍において、その揺らめきは甘露の

如く目にする者を誘惑する。どうやらその誘惑に負けた、正直な優男ロメオが懐に仕舞い込もうとしたようだ。

自分のズボンが紛失することは幾度かあった。ズボンのみならず衣服や下着がなくなっただけでもあった。犯人は分かっていたが、一晩経ってしまふと取り戻す気も失せる。何に使うのかは知っている。何に使ったのか想像できてしまふ。そう思えばゴミ箱に捨てるのと大差はない。

魔女のプロマイドではなく、彼らがお宝写真と呼ぶものの存在を知っているのだ。嫌悪というより呆れが先立つ。一応上官の私物を盗むのだから、それなりの罰を食らうというのによくやるものである。無論感心はしない。

「分かりましたか？ いいですか、今後また同じことがあれば営倉に送りますからね！」

その権限はこちらにあるのだが面白いので放っておく。

生真面目に反応するから面白がって男衆もからかうのだ。可愛がられているのである。だらしないことも起こるが、菓子を分け与えたり食事を少しだけ増やしてやったりもしている。

それを分かっているからカツサンドラも今回は見逃したのだろう。

「……怒るから調子づくのに」

「中尉はなんとも思われませんか！」

「ズボンの一枚や二枚ならね」

安眠を妨害されない限り勝手にさせておけばよいとすら思っている。注意したところで聞くわけもない。徒らに罰則を与えれば使える人員が減る。

この部隊は歩兵戦力との連携を前提として戦闘を行うことも多い。特に航空戦力と共に地上戦力が認められた場合には、敵侵攻遅延の為に曲射砲による支援が必須である。装填が数秒遅れただけで生死が分かれる状況において、人員の欠如は正しく致命的だ。

要するに罰を与えるだけの余裕がない。世も末だ。

「普通そんなことを言うのは……」

「何？」

「いえ。あの、ふと思ったのですが、中尉はおいくつなのですか？」
タリアは仮眠を取るべく自らのテントに向けて踏み出した足をはたと留めた。

その止まり方は突然歯車のずれた機械のようだった。

「あんたが気にしても仕方がないでしょう」

「いや、単なる思いつきで」

しばらく黙り込んでから、タリアは二十三、とだけ呟いた。

魔力の減衰は軍属魔女の最も大きな心配事の一つである。魔力があるから戦えるのだ。魔法が使えるから同僚を守る事ができる。それをなくしてしまえば戦闘要員として軍に居続ける意味はなくなってしまう。

残酷であるが、その時点で一線を退くより他がない。どれだけ同僚が苦戦しようと、どれだけ一般兵に犠牲が出ていようと、目の前でつい先日まで同等に戦っていた敵に友人が殺されようと——魔力を失えば何もできないのだ。

個人差はあれ、十代が全盛期。それだけは多くの者に当てはまる。二十三歳という年齢はそういつた意味で危ういと思われがちである。

「魔力は大丈夫なのですか!？」

「今のところ何ともないけど、何時まで続くか」

いきなり飛べなくなるかも、と彼女は嘯く。

「そうになったら私は……」

「ま、一人で頑張つてね。ちゃんと本国から応援するからさ」

冗談である。

魔女は花に例えられることもあるが、花びらに皺が寄る気配もないのだから自分の体は意地が悪い。そんなことだから戦うしかないのだ。力があつて、敵が居る。ならば生き残る為には戦うしかない。休暇の申請も通らないのだ。せいぜいこの新人には頑張っていただかねばならない。

彼女はカッサンドラをテントの前で待たせ、一旦奥に入っていた。

一分と経たずタリアはその手に新品の円匙シヤベルを握って戻ってきた。表情はにこやかである。

「——ところで、さっきは何を言おうとしたのかね」

「ああ、いえ、お気になさらず」

「そ、じゃあ私は仮眠だから」

タリアは円匙を部下の手に押し付けた。

失言の代償は物理的に重かった。言葉になってはいなかったのだが。

熟練

異形の襲撃はある程度予測されている。その予報に合わせて対策を練るのが常道だ。最近の外れることが増えてきたように思われるが、他の来襲を察知する方法というのは地道な哨戒、そして自分の固有魔法に限られてしまう。前者はともかくとして後者など採用以前の愚策だ。主に疲労という問題がそれを不可能にしている。自分が倒れては我らが基地など唯一度の襲撃で壊滅しかねない。

思い上がりか。違う。事実である。苦々しくもそれが現状なのだ。

新人はどう足掻いても新人で、魔力を持たねばその鋒は有効打足りえない。自分が文句をつけたところで何が変わるものか。不可能が可能へと切り替わることなど有り得ないのである。そのような夢物語が実現するというのなら、どれだけいいだろうか。科学の輩にも限界はある。魔法にも不可能はある。それが永久不変の実際である。

軍に居り、魔女であるなら、戦う。戦わねばならない。

確かに面倒は面倒だ。然れども怠慢が許される立場ではない。怠けたいが怠けられない。満足に休めないからこそ、最低限の休息を疎かにしてしまえば詰む。

そう、本音を言えば休みたい。眠りたいのだ。

ネウロイさえ来ていなければ、である。

「さあ、お待ちかねの出撃ですよ。嬉しいでしょ」

「……はい」

大丈夫か、この新人。

不安になるような細かい返事がレディの喉から絞り出された。その胸中に渦巻くは死への恐怖と功名心。新兵にありがちなことである。悪いとは言わないが程々にして貰わないと戦闘に支障が出る。

だが、戦っていたただかねば困る。経験がないことは仕方ないが、それで終わっている話にならない。恐れているは何も始まらないのだ。いや、恐れているも動けば何かが変わることもあるのだ。

タリアは啞えた煙草を砂に吐き捨てて汗の滲む頭皮を掻き毟った。

苛立ち、否、焦燥感からの仕草と見て間違いはなからう。一応彼女の世話した新人の初戦闘になるというのに、当の本人が思いつめた顔のままでもなじりともしない。さしもの中尉殿も冷や汗を流さずにはいられないのだろう。

真昼のことだった。直上に輝く太陽が殺伐とした喧騒を照らし出している。水を嫌うネウロイの特性から珍しいことではない。ただ決まりきったこととは言え、兵が些かの皮肉を感じることに不思議はなからう。

血を流すのは兵である。涙を流すのも、同時に泣く機能すら失うことも、人間にのみ押し付けられた権利であった。

空に舞い上がる。使い魔の機嫌は悪くない。

飛行脚の調子もいい。ひとまず自分の心配は要らないようだ。これから間違いなく足を引つ張られ続ける事になるのだから、この時点で不調が見つかれば、すぐにでも新人に基地での待機を命令すべきである。

砂が口に入らないよう、スカーフをきつく締める。ゴーグルの革帯に噛んだ砂塵が擦れた。最初は痛いとその都度気にしていたが慣れるものだ。接敵までに再度弾倉を確認し、首を回す。

「今回は大型一機に小型が幾らか、それから地上戦力もアリ。あなたの任務は？」

「は、はい。大型の挙動に注意しつつ小型の排除。曲射砲の攻撃目標指定、及び弾着観測です。あと、空中戦力の排除の後に地上戦力の掃討も」

「よろしい、無理はしないように」

通常間接射撃は観測、砲列、指揮がそれぞれ別個の班として設けられた上で行われるものである。勿論本来ならば一般兵でも観測は行えるが、自分たちの敵は異形である。観測兵を一々新しく手配・任命するのは非効率が過ぎる。

可能性の話しよう。通常兵器での破壊が困難ではあるものの、大型の火器ならば異形の迎撃も不可能ではないだろう。しかし非魔女の兵が携行する銃器では傷を助けることすら、らくだを針の穴に通す

よりも難しいと言える。接敵しなければいい話ではあれども、理想の通りに事が進むことなど期待できない。何かの拍子に観測班が潰されては拙いのだ。

以上の理由から、地上戦力が認められた場合に観測手となるのは自分、今回の場合はレディが適任である。最悪反撃せずに飛んでさえいれば、案外とどうにかなる。

空戦魔女の戦闘において機動が重視されるのは、つまり敵の攻撃が回避できるからだ。こちらが敵を撃墜するまで生き残れば、勝てる。格闘戦の練度とはその論法をどこまで高度化せしめるか、それに尽きる。

だというのに、とタリアは嘆息した。

彼女の隣を飛ぶ少女の顔面は蒼白を通り越して紫がかった。原因は当然極度の緊張、そして恐怖である。冷や汗は滝の如く、安全装置がかかっているにしてもその震える指がいつ引き金にかかるかと思えば、上官の心中は穏やかでない。

フレンドリィ・ファイア
友軍 誤射など笑い話にもならぬ。タリアの任務は敵勢力の撃滅と新人の補佐、これにおいて背中を撃たれては堪らない。彼女のシールドはそこまで柔軟性に富んだものではないのだ。

「あのさ、もう少し肩の力抜きなさいな。確かに小型は面倒だけど、あなたの技術ならそんなに簡単には落とされないからさ」

「い、いえ……大丈夫です。問題ありません」

「そういう言葉はね、表情だけでも取り繕う努力をしてから言いなさい」

薄々とは分かっていたのだ。この少女、本番に弱い。もつと厳しく言えば圧力に弱い。要するに打たれ弱いのだ。模擬戦の時も同じだが、一度失敗すれば調子を崩し、そこを突かれてまた失敗する。更に混乱して大失敗、であった。

色々と文句が多いが指示には従うので分かりにくかった。順序が逆だったのである。嫌々物事をこなすのでその腹いせに無神経な言葉を吐き出すのだ。注文をつけるまでにはいいとして、反撃に弱いというのがどうにももの悲しい。

よって負担の逃がし様がないこの状況では誤魔化せない。弱音の一つでも零せば助言のやりようもあるというのに、見栄っ張りもここまでくれば面倒だ。

死にたくないのは当たり前、怖いのも逃げたいのも不思議ではない。せめて同年代の魔女が居れば吐き出せたのだろうが——こればかりは不運と割り切るより他がない。

手を握ってやる程の温情をこの女に期待するのは間違いである。彼女はただ、開いている方の右目を魔力光に輝かせた。

「助けが要る時はすぐに連絡。何か不調があれば報告して。口に出せなくても自覚しなさい」

「問題ありません！ 私はい」

命令、とタリアは部下の言葉を強引に振じ伏せた。

苛立ちの含まれた声に少女は口を噤む。同性ではあるが年齢の差は大きい。砕けてはいても威圧的な態度を取ることの少ない上司が、珍しくも語気を激しくしたのだ。気は強いが肝の小さいカツサンドラ・レデイが黙り込むのも無理はない。

危機にあってもそれを認知出来ないのでは対応が出来ない。如何にタリアが熟練であろうと、繰り返すが、不可能なものとは不可能だ。墜ちてもらっては困るのである。生きているだけでは食料の無駄、という意見もあるだろうが、自分はそうは思わない。

死んだ者に銃は使えない。砲撃を貰えば武器は壊れる。弾薬も無事では済むまい。飛行脚は修理できず、自分は死亡届を作成し、政府が遺族に弔慰金を出さねばならない。死体は働かないのだ。一人分の食糧の為に他の物資を無駄にし、金を出し、手間をかける。その方が余程無駄な出費である。

レデイについては今のところ物資源でもある。二重の意味で死んでもらっては困る。できるだけの援護をしてやるだけだ。

「さて、敵反応を確認」

タリアは髪を掻き分け、無線機に呟いた。

重々しい得物が僅かに嘎れた声を上げる。重機関銃だ。例によって彼女は名前に頓着していない。新人を守りながら戦うのであれば

狙撃銃では難しい。背の鉄槌も鈍く熱を持っている。潤沢な魔力量によって打撃力は保証されている。

対して彼女とロツテを組む少女は——呪文のように何事かを呟いていた。ただし、一人で。

痛い、とカツサンドラが悲鳴を上げた。

遂に堪りかねたタリアがカツサンドラの頭をはたいたのである。とてもいい音がした。

「あんたにも事情はあるだろうけど、今は忘れなさい。撃墜しなくてもいい。余裕があれば銃を構えるくらいでいいの」

「ですが……」

「あんたの任務は座標指定と弾着確認、それから私の背中から離れないこと。お分かり？」

返事はなかった。

遠方からの砲撃で途切れたのだ。斜めに展開した魔導障壁が殺意の奔流を受け流す。正面から受けるよりも楽だ。先制攻撃は敵に譲ってやった。仕方がない。次は貰う。

大型一機、小型が十と少し。敵ながらきちんと編成されている。地上の戦車型の存在も考えると、本日の手前は多少気合を入れてきたようだ。何の関係があるだろうか。落とせば同じだ。いつもより疲れるだけだ。

弾をバラ撒きながら掃射を躲す。小型の厄介なことは砲門が多数存在するということだ。多角的に狙われるというのは実に面倒である。運良く小型を一機落とせた。幸先は良い。

着いて来い——タリアは大型の下方に針路を取る。彼女の後に自信のないエンジン音が続いた。二人を狙う射線が交差する。機銃も砲もあったものではない。空を舞う殺意という殺意が少女らを狙って殺到していた。

無機質な赤光は止むことがない。その最中に魔女は鉛の魔法を叩き込む。古より繰り返された異形と魔女との微笑ましい触れ合いである。笑顔の代わりに凶器を交す争奪戦である。

「こ、こちらレディ少尉。攻撃目標を——」

新人はそれでも任務を果たそうとはしているようだ。意外だった
が感心である。

「どうあれ、敵は迅速に排除せねばならないが。」

間もなく地上では曲射砲による制圧が始まるだろう。だとしても
過信はできない。あくまでも砲撃は足止めでしかないのだ。初めに
曲射による侵攻妨害、砂丘を登られたならそこを塹壕から狙う。塹壕
を越えられたなら詰である。

「四時方向、行くよ」

身を斜めに切り落とすようなイメージ。発進するのではなく自由
落下の感覚で射角の通らない懐に潜り込む。小型の射撃が左の頬を
掠めた。摺り抜けながらぶん殴る。振り向きざまにハンマーの柄で
新人を押し退け、尻を追ってきてくれた色男の中心を撃ち抜く。弾を
数発無駄にした。

数はそれほど多くもない。銃というのは便利だが、銃口の向いた方
にしか弾は飛ばないのだ。左右に蛇行するだけでも格段に被弾率は
下がる。射撃が当たればそれでよし、当たらなければ近付いてハン
マーで殴ればいい。

しつこい個体を目標とし、シールドを張った状態で突貫する。砲火
を遮断、接近、粉碎する。大型が相手では通用しないが陣形を崩すの
には有効だ。

ただの経験である。

カッサンドラ・レディに欠けていて、タリア・スミスに蓄積された
もの。正確な自己分析、敵戦力の把握、それらを含んだ行動選択こそ
がこの結果である。

寄れば叩き、逃げれば撃ち、楽に避け、必要ならば強引に追い込む。
その見極めが出来るか否か。

シールドの使い方もまた然り。戦車による戦闘と同じ発想である。
傾斜装甲の重要性と同様に、擬似的ではあるもののその強度を増加し
体力を温存出来る。

簡略化し、最適化する。手間を惜しむという思考はそこに行き着
く。

タリア・スミスは面倒くさがりで、女としては色々終わっているが、幸か不幸か戦いには向いていた。

「ああ、全く」

地上の敵が居ると手間が増える。対空砲火は中々当たらないが、当たる時には憎いくらいに追ってくるものだ。動いていれば当たるま
いと思った時に限って、敵はやる気を出すのである。扶桑では空気を
読むという文化があるらしい。そう思うと、取り敢えずネウロイは扶
桑人が嫌いなのだろう。連中の空気を讀まないことと来れば一級品
だ。

小型機を一掃したところで、タリアは大型から目を逸らさずに鼻を
鳴らした。

「お嬢さん^{デレ}」

「——は、はい！」

それまでの感情に驚愕を大いに混ぜ込んだ表情でレデイは応答し
た。そこまで驚かれると、これまでどれだけ自分は舐められていたの
かと思ってしまう。それなりに経験のある魔女ならばこの程度は
やってのけるものだ。しかし観測手としての役割は果たしていたよ
うなので何も言わないでおく。

大型を急いで潰す。終わったら地上の敵を片付ける。

「離れて待機。絶対に近寄るな」

以上、とタリアは弾倉を入れ替えた。カツサンドラが泡を食って後
退する。

彼女の選んだ行動は、大型ネウロイの上方に突っ込むという明快な
ものであった。

地上からの攻撃はそれだけで無力化される。何故ならば大型の、正
にその図体が勝手に壁となるからである。となれば注意すべきは大
口径の砲撃と機銃の射撃となる。

わざわざ彼女が正面から攻勢に出たのは囹の意図もあるのかわし
れない。

砲火の嵐を潜り抜ける。大でも小でも生身に当たれば大差ない。
デリンジャーだろうと8.8cmだろうと頭に当たれば人は死ぬ。

同じことである。

大型を相手にする時覚えておくことはたった一つ、コアを探すことだけである。

中型にしても、であるが、ネウロイは原則コアを破壊しなければ消滅しない。敵の攻撃を避けるのは共通であるなら、特筆すべきは連中の巨大な体のどこにそれがあるのか見付け出す手間だ。

重機関銃が火を吹く。深海魚のような形態の異形の装甲を鉛玉が食い荒らす。身体機能としてか何なのか、ネウロイは金属質の怒号を響かせた。

硬い表皮を剥がされた恥辱に対してか。そのような神経が通っているのか。

タリアは全くそのようなどうでも良いことを考えた。

故意に射撃を集中させず、敵の表皮全体を削るように掃射する。

これこそコアを見付け出す手っ取り早い方法である。場所が分からないのなら、適当に攻撃して探してしまおうということだ。自分ひとりでは幾つかの砲門を破壊するだけで弾薬を切らしてしまうので、この方が確実かつ楽である。

崩れた装甲板の隙間から紅の光が漏れている。分かりやすくも中央だった。

砲撃を無視、機銃の射線は面積を狭めた障壁で遮断し、肉薄する。渾身の力で修復の始まった装甲ごと打ち抜いた。

「ヤッ」

おじ様方を助けに行こうか——と。

爆発から逃れ、いつものように気怠げにハンマーを肩に担いだタリアは、そこで漸く息をついた。戦場に想定外は付き物だが、何時だってドラマに溢れる展開が待っているかと言えばそうでもない。

——第一声は疲れた、そうと決まっている。

水浴びをしたところで疲れまでが流れ落ちてくれるわけではない。そんな設備があれば是非とも導入をお願いしたい。何がどう転んでもこの部隊に最新の機器が配備されることなど有り得ないということとは知っている。大人だつて時として夢が見たいのだ。

夕焼けが非常に、本当に眩しい。テントの中に差し込むものだけでも目が痛いほどだ。腹立たしい。太陽にケチをつけても仕方がないのは分かる。

それも持ち主の居なくなつた識別標を前にすればこそ、辟易する自分を非難する気は起きない。

帰投後のタリアを待ち受けるのは被害と損害の報告である。そこに戦死者の報告も含まれるなら、彼女の疲労が尽きないことも肯げよう。

「中尉、一旦休まれては？」

「そうはしたいですがね、久々の格闘戦で疲れたのですよ」

なら、と口を開いた副官に彼女は首を振って応えた。

「今寝たら、夜間哨戒の時間に起きられません」

「しかし……」

「そりゃ寝たいですよ。でも、これで襲撃があつた日には永眠しちやいます」

有無を言わず引き出しの薬を静脈に射つ。眠気覚ましとして重宝している。時々嫌な方へ入るのが問題だが、使わなければ無意識のうちにベッドへ飛び込むことだろう。

仕事を早く終わらせるには、兎に角片端から片付けるしかない。新人に書類仕事を仕込もうとも考えているが、暫くは期待できまい。

「お嬢さんはどうです」

「ああ、食事をしてから寝てしまいましたよ」

「まあ、仕方ないですね。明日は朝から塹壕掘りですから、大目に見ましよう」

報告などしてもらわなくてはならないことは多い。そうとは言つても初戦なのだ。無理に起こして機嫌を悪くされても嫌だ。この疲れている時にあの神経に障る声を間近で垂れ流されるのは御免こうむる。

レディはと言えば、少々落胆した様子も見られた。自分の能力が期待したほどではなかったということではなく、まともに戦えなかったことが気になっていたらしい。地上型を相手にした時は悪くない活

躍だったのだが、彼女としては不満だったようだ。

タリアは副官に濃いコーヒーを淹れさせ、硬い椅子に深く座り直した。

「また人が減りましたよ」

「——そうですね」

「次の補充人員、いつ来るか覚えていますか？」

「近いうちに、だったかと」

無気力に笑い、女は万年筆を手取る。乱暴な字は単に育ちを表しただけのものか。

数時間後、彼女はその日二度目となる出撃の為、テントを後にした。

魔法のカード

そこには封筒があつた。厚さにして数センチにはなろうか。縦に置いてそのまま直立することすらできるだろう。立てることそのものに意味はないが、いわゆる比喻表現というものである。中身は何か。正しく人の夢である。誰もが欲し、奪い合う。時として醜い争いの原因となり、時として争いを収める特效薬ともなる。

如何なる魔女の創りし^{エリクシール}霊薬か。それとも大自然の神秘とやらが生み出した代物か。

否、^{マネー}金だ。金である。金銭、金貨、この場合は紙幣だつた。

積み重なった紙束が包みの質量と密度を上げているのだ。程よい重さ、心地の良い手触り、素晴らしいものである。有史以来人類が作り出したあらゆる物品の内でも最も尊いものではないだろうか。

「あの、中尉」

新人が怖々と何かを言っている。どうせ重要なことではないのだ。他人の思考を妨害するものではない。上司が相手ならば尚更である。この娘と来れば、不用意な言動と無駄に満ち満ちた反骨精神で砂漠の片隅に追いやられたというのに、未だ口煩く優等生的な苦言を呈して下さるのである。有難い限りだ。

だが、何たることか。普段ならば鬱陶しいその声もこの日だけは耐えることができる。この手にある重みが何よりの報奨だ。

「中尉、よろしいでしょうか」

「何？ ええ、今ならいいでしょう。訊いてごらんなさい」

「その、お持ちになつている給与袋は、私のものでは？」

舌打ちの音がタリアアの口から漏れた。まるで部下の給与を中抜きしてやろうかとも思っていたような、非常に柄の悪い反応である。実行するかどうかという点は不明であるし、これまでに不道徳な行いをしてきたのかということも分からない。ここで描写出来ることとしては、二十三の女が不機嫌な表情で十五の少女に封筒を押し付けたということ、ただそれだけである。

中尉殿が真に拝金主義者であるのかどうかは定かでない。少なくとも金子の重要性については大いに理解していることだろう。

将官の懐にどれだけ上手く山吹色の焼き菓子を滑り込ませることが出来るのか。或いは金を回すことで彼らの嗜好にあった物資・人員を配備することが可能なのか。

経済の一区画、特に出世という組織構造を賄賂という歯車で回そうとした時、金の延べ棒は最も燃焼効率の良い燃料の一つである。他にも使用可能な燃料としては、地位に家計、その他軍閥・出身等々、色とりどりの選り取りみどり。無論、誰もが全てを使用出来る程、安くないのは明らかだ。

軍というのはどう足掻いたところで権力と切り離すことが不可能である。根本からして国家の運営に食い込んでいる。一国家はその国民によって成立する、などと高尚なことを述べる者もあるだろう。しかし、如何にお題目を並べようと金がなくては食料すら手に入らない。

無理矢理に国が食料や土地を得んとすれば、それこそが国家間の紛争というものである。行き着くところは同じなのだ。

「額はそれなりにある。大事に使いなさい」

「……あなた、本当に中尉ですか？」

「何、没収されたいの？」

いや結局同じことか、とタリアは上機嫌に漏らした。

そう、珍しくも上機嫌なのである。皮肉な笑みは形を潜め、その顔に浮かぶのは厭らしい——もとい清々しい笑顔である。給料日に顔を顰めるものは少ないだろうが、それでも周囲の人間にとってみれば、女史が眉を寄せずして笑う光景など滅多に見るものではない。

カッサンドラにとっても例外ではない。若き魔女は上官の変貌ぶりに冷や汗を流していた。彼女の心の声を代弁するのならば不気味、気色が悪い、意味不明、謀か。そのようなところだろう。

何しろ彼女にとってみれば、上官殿が屈託もなく微笑む状況など想像もつかないものでしかない。驚天動地の領域である。現状屈託はあれども、嫌悪感を滲ませるような唇の歪ませ方をしていないという

だけで少女は混乱をきたしている。

全くもって失礼な反応である。自分だつて嬉しいものは嬉しいのだ。

例えば懐が温まった時、もしくは空腹が癒えた時である。一度か二度食料の配給が滞った際には死に目を見た。ネウロイを排除した直後に狩りに出て食料を調達する。あのような日々は二度とゴメンである。

兎に角、今日は素晴らしい日だ。臨時収入を得ることができると。

タリアは事前にやつつけておいた書類を文箱に放り込み、大きく伸びをした。出撃時以外はタンクトップ姿であることも多い女性である。カツサンドラの視線が一瞬恨めしそうなものに変わったが、彼女が気付くことはなかった。

彼女はご飯にしましょう、と言って椅子を蹴倒した。

時は夕暮れ、明々とした太陽が地平線に沈む時間帯である。この一日の内に襲撃はなかった。新人少尉は相変わらず穴掘りに駆り出され、その上司はコーヒーの世話になりながら机と向き合っていたのである。

全員の財布が重くなつた基地は俄かに活気づいていた。故郷の家族に仕送りをする者も、何か嗜好品を取り寄せようとする者も様々である。折を見計らつての市街地への遠征に賭けて筆筒貯金ならぬ靴貯金に勤しむ者もまた然り。魔女のブロマイド購入に充てる男も少なくはないだろう。

人気のある魔女の写真は高値で取引される。アフリカにおいてはマルセイユがその代表格であつた。物々交換においてはこれに勝る品はない。金というのは使うのに場所を選ぶという意味では不便である。早々に現物に変えようという判断は間違ひではない。手に入れることが出来るかという点、それはまた別の話であるが。

基本的に、勇猛果敢にして絢爛美麗なる少女の姿は目に優しいものだ。需要はあるだろう。ここで一つ蛇足だが、親愛なる中尉殿のそれは倉庫で木箱の下敷きになっていた。察するに無惨な程売れなかつたらしい。

さて、そういった次第であるが故、食堂は怒鳴り声と歓声とで賑やかな様子であった。兵にとって必要なものは適度な緊張と食糧、そして娯楽である。

女遊びか酒遊びか、それとも賭博か。ここでは博打である。

カツサンドラは僅かに表情を固くしたが、配給分の食事を受け取るとその不満を溜息に変えた。多少器用さを身に付けつつあるようだ。「そんなに面白いものですかね、賭け事なんて」

「楽しいに決まっているじゃない。博打好きが家を潰したなんて話、古今東西珍しくもないでしょ？」

自分ならばそのような間抜けなことにはならないが、博打というのは薬によく似ている。何となく熱中すると万事を賭け事に結びつけてしまうような気すらするのだ。もともと、冷たいものを使っている自分が言えたことではない。ついでに自分も賭けが好きである。

ポケットに突っ込んでおいたカードを机に叩きつける。乱暴に扱ったことに意味はない。

新人の顔が瞬く間に見事な仏頂面へと変わった。賭け事やいわゆる行儀の悪い真似が嫌いな性質をしている。だがそれはそれだ。

「——家は潰さないけど、手元に有る札束を賭けることならできますね？」

「先程、大事に使えと」

「いやあ、ごめんね？ 歳かな。忘れっぽくていけない」

年増が、いい度胸ね——二人の視線がぶつかって火花を散らす。女の戦いは激しくも静かである。その初期段階においては、取り敢えず。第二段階、掴み合いの引っ掻き合いにシフトした場合は話が違いますが、食堂の片隅で少女と女は周囲の空気を軋ませて向かい合った。

両者の頭部に使い魔の部位は見られない。しかし何らかの魔力に類似した物質が、男臭い基地の大地に有り難くない花を添える。扶桑人だったなら、その色合いを菊の花と例えるだろう。

要するに、タリアは哀れな新人から給料を巻き上げてやろうと言っているわけである。博打嫌いの新人に上官としての立場を利用して相手をさせるのだ。単に懐を潤すという意図だけでないことは確實

である。

カツサンドラ・レディとしては、この配属後初となる給料を実家の両親に送るつもりだったのかもしれない。弟妹に玩具の一つでも買ってやろうとしたのかもかもしれない。

人情味溢れた一切の内情を笑い飛ばして、日頃の鬱憤を晴らしてやろうと張り切ってしまうのがタリア・スミスである。控え目に言つて性根が腐っている。

常在戦場、正にそのことである。敵が何時如何なる場所で現れるかなど分らない。今ならばいいだろう。成程、人類は連合軍として形だけでも連携している。しかしそれはこの戦役に限つての話だ。

仮にネウロイを駆逐したとしよう。この殺風景な地平線の彼方まで、小数点以下の例外もなく連中を討ち滅ぼしたとしよう。有り得ないことだがその人の夢が成つたと仮定しよう。

ならばどうなる。後に敵となるのは隣の誰かだ。人類連合軍として手と手をとつて団結した、その隣人だ。かつて握つたその手のひらをナイフで突き刺すのが軍人なのだ。

だから、こういった流れには慣れさせておくべきなのだ。美辞麗句を以て若者を戦場に送り出す上官ども、二枚舌の乱舞する戦場、正常な士官ならば避けては通れぬ道である。

扶桑には巧言令色鮮し仁、甘い言葉に氣をつけるという諺が古くより伝わっているらしい。だが泥を食らつて金を吐くことすらも当然として求められる地位に就くのなら、巧言令色大いに結構。使わず死ぬより使つて生きる、である。

これは指導なのだ。教導である。これより茨の道を行く部下へのささやかな教育だ。レッスン

「どうする？ ポーカー、ブラックジャック、何でもいいよ」

「ちよつと待つてください。何で私がやることを前提にしておられるのですか」

「あれ、やらないの？ いいのかな……どこかの誰かが博打をしていた上官に噛み付いて、拳句砂漠の端に送られたとか。そんな噂を聞いたことがあるけど」

「どうでもいいことは覚えておられますね！」

「若いからね」

遂に齒軋りを始めた部下の姿にタリアは頷く。

基本、煽り合いというのは性格の悪い方に軍配が挙がる。

賭け事の強弱もそこに通ずる。ブラフもポーカーフェイスも、言うなれば素直に感情と思考を伝えない為の技法なのだ。

結論から言えば、タリアは強かった。

べらぼうに強かったのだ。

「降りる」

レディの表情が歪む。良い手札だったのだ。ブラックジャックのルールは単純だからこそ奥が深い。感情の読み合いと咄嗟の判断が求められる。全くこの娘には向いていない。このゲームが、というよりも博打に向いた性格ではないのだ。

思ったことはそのまま口に出る。考えたことを真直ぐ実行してしまう。感情を隠すなど不可能なのだ。観察していても面白い。

新人の給与袋は厚さが三分の二程度に擦り減っていた。わざと勝たせて勢いづけて降りさせないようにしているのもあるが、負けず嫌いが幸いしてやめる気配がない。この娘、絶対にカジノで身ぐるみまです剥されるタイプである。

魔女の給与は高い。せめてもの配慮だろう。都合がいい。一般兵よりも搾り取れる。

賭博とはなんだったのか。確率論の追従する隙すら見えない完璧なプレイングである。降りるべき場面で降り、勝ちの機会を決して逃さない。好機を逃すとしてもそれすら計算。

優れた賭博師は儲けない。兎に角負けないのだ。

タリアはゲーム開始以来楽しげな表情を崩していない。それは崩す要素がなかったことも味方してのことである。

半泣きの少女を前にしてご満悦とは中々にいい根性をしているが、彼女がそれだけ勝っていることもまた事実。

お局が可愛らしい新人を虐めているその現場に踏み込んだのは、とある若い二等兵だった。

「あれ、中尉。賭博は禁止って言われていませんでしたか？」

「……気のせいよ」

「え、いや確かに……」

タリアは何事かを口に出そうとした青年の襟首を力任せに引き寄せた。いいから余計なことを言うな、と彼女はヘッドロックをかけた男の耳に囁く。

青年の顔はだらしなく緩んでいた。幸いにしてそれを目にしたものは彼の同僚のみである。必然的に彼は就寝までの予定を友人たちによる折檻で埋めることとなった。彼の幸福感の源は何なのか。その真相は彼の心に未来永劫美しき思い出として記録されるに違いない。

しかしその口封じも手遅れだったようだ。二人の魔女が座る席の傍らには、副官に任命されている男が眇めた目で上官を睨めつけていた。

「中尉、以前申し上げましたことをお忘れですか？」

「いや、何のことだか……」

「確かに賭博は禁止と決めましたな？ 着任したての新人から金を巻き上げないこと、と」

「人聞きの悪い。何のイカサマもしていないのに、ひどいじゃないですか」

カードのすり替えや仕込みはしていない。あくまでも自分は自分の能力を有効活用して最大の利益を得ているだけだ。それをいかさま師のように言われるのは心外である。

だが彼女の弁明など何のこと、副官は青筋を立てて怒鳴りつけた。「街のカジノ一つ潰しておいてどの口が言いますか！ 固有魔法を悪用する魔女なんてあなただけですよ！」

ち、とタリアは舌打ちで返事をした。

地獄で天から垂れた蜘蛛の糸を発見した誰かのようにカツサンドラが項垂れていた顔を上げる。自然、そこに湧き上がるのは一つの疑問である。

固有魔法とは何か。

魔女は魔力を宿す。そして魔女の素質を持つ者は少ない。その少ない中の更に一部の魔女だけが行使する超常の力、それが固有魔法である。権能は様々であり、治癒や放電——果ては未来予知に至るまで——その力は多岐に渡るものだ。

万能ではなくともその力は正しく魔法。アフリカの星、マルセイユなどもこれを保持しているとされている。

「固有魔法？　中尉が？」

「ああ、まあ。一種の念話よ」

「読心と正直に言われては如何ですか」

余計な事を言う。

良いではないか。この魔法のお陰で出世できないのだ。思考や記憶を読んでもしまうのだから、それはもう都合が悪いだろう。本部にすら来て欲しくないに違いない。下らない。何が嬉しくて五十六の男の心など覗くものか。

迷惑しているのはこちらなのだ。目を媒体に発動するものだから不便極まりない。いわゆる魔眼というのに近いが、効果範囲が無駄に広いので腹が立つ。

金儲けに使うくらい構わないはずだ。どうせ減るといっても金だ。生命を獲るわけではない。

「ということは、私の手札とか、全部分かって——」

副官がカツサンドラの肩に手を置いた。

出来レースもいいところである。相手の手など見えているも同然、思考が読めるのだから負けるわけがない。目を瞑れと言え、それでは見えないと返されてしまう。

そんなことだからタリアはギャンブル禁止とされていたのだ。誰ひとりとして今この時まで哀れなレディ少尉にそのことを告げなかったのは、誰かが口封じをした結果なのかもしれないが、憶測に留まる。

「返してください！　そんなものはいかさまです！」

「嫌よ。何で」

「だ、だって不公平じゃないですか！　卑怯ですよ。汚いです」

「中尉、いい加減にしてください。そんなことだから悪評を流されるのですよ。売れ残りのブロマイド、もう忘れたのですか？　大赤字でしたよね？」

残酷なまでの苦情の嵐である。これも日頃の、そしてこの日の中尉の行いが招いた悲劇であった。斯く言うこの副官も過去に金を巻き上げられ、故郷の娘にプレゼントを買う費用を奪い取られた者である。その甲斐あつてか非難は轟々、言葉の刃は的確に女の急所を貫いていく。

場末とはいえ部隊の指揮を任される程の魔女なのだ。普通ならばそれなりに人気は出る。その写真の収益が赤字となったということは、外部人気は推して知るべし。酷いことである。明言はするまい。タリアは少々の沈黙の後、据わった目をして十一歳、と呟いた。

「十一歳が何か？」

「最後に描いた水の都。純白のシートのキャンバスに——」

カッサンドラが拳を食卓に振り下ろした。大口径の拳銃を誤射したかと騒ぎになるほどの大音響が食堂に響き渡る。

少女の顔は鮮やかに赤熱していた。ロマーニヤ近郊の海で漁れる蛸を茹でたなら、丁度このような格好になるだろう、という具合である。

タリアが優しく微笑みかけ、少女は頭を垂れた。

「少尉？　中尉殿、一体何を言われたのですか！　そんなことでは」
「縄」

副官の喉が一瞬で干上がった。

タリアが何を言わんとしているのか、彼は理解したのである。

非常に、非常に拙いことである。男にとっては途轍もなく非道いことである。

「……首輪」

「ちよ、中尉！　待ってください！　話し合いましよ。落ち着いて、落ち着いて」

「黒髪好きですものね、おじ様は」

なんのことやら、と言いたげなお嬢さんにはまだ早い話である。

自分だつて知りたくはなかった。勝手に思考や妄想が入り込んでくるのだから仕方がない。ズボンのことも分かっているのだ。知っているから注意する気も起きないのだ。

「あの、黒髪？」

「いやいや、お嬢さん。単にね、おじ様は柴犬を飼いたってだけよ」
「は、はあ。副官さんは犬がお好きなのですか？」

この娘も大概単純だ。大いに助かる。

身体を凍りつかせたまままで言葉にならない呻き声を返す機械となつた男は放つておいて、食堂から出る。仕返しだ。このくらいは許されるだろう。ブロマイドのことは漸く忘れてきたというのに、掘り返してくれたのだ。自業自得である。

また少し休んで哨戒に出ねばならない。

月は丸く、一際輝いているように思われた。戦利品は懐にある。眩しい程の月光はこの勝利を称えてくれているのだろう。

この気分なら、心地よく仮眠を摂れそうだ。

馬鹿らしくなって、彼女は白い息と共に短く笑った。

消極的未來への手紙

さて、とタリアは口元に手を当てた。

夕焼けの落ちる美しい空の上でのことである。新人少尉を伴っての出撃は、片方の手で数えるのに苦労する程度には回数を重ねていた。目立った外傷もなく、目立ったドラマもなく、様々な観点から凹凸の激しい二人組は淡々とこの日の敵襲を凌いだのであった。

その作業感溢れる戦闘こそが、本来タリア・スミスが求めた結果である。

劇的な戦闘には英雄譚が伴う。

世に一騎当千の武勇伝が溢れる時、一般の兵にとってその時代は地獄である。戦乱があればこそその戦果、人死があればこそ生存したこと自体への評価が発生する。

彼女らが活きる時代では敵が怪物であるだけで、極々少数の勇士が輝かしく活躍するその舞台は無数の遺骨が土台となっている。それでも、その大前提を差し置いてなお彼女らが賞賛されるのは、守った命の価値があるからだ。

生きるに厳しい世情だからこそ、生命の値打ちが増す。生きているのが当然の世界ではこうもいくまい。極論、この世に死が失われたなら、生命活動が維持されることが非道く煩わしく扱われるようになるだろう。

無論タリアはそこまでのことを求めはしない。彼女のひとまずの目標は、弾雨の降り注ぐ戦場をただ平然として潜り抜けること、それだけだった。

刺激があるということは危機があるということだ。

故に戦闘というものは何の悲劇も喜劇も喝采もなく、普遍的に平凡なままで収められるのが理想なのである。語り継がれる武勇伝など

——少なくとも彼女にとつては——必要ではないのだ。

「どうにかマシになってきたじゃない」

「そ、そうですか」

「毎度心の中で遺言を考えなくなっただけ、進歩した」

実家の弟妹に向けて、だとか、そういったことを最初の方は接敵するまで延々と思案していたのだから、笑いものである。大体墜ちたとして誰がそれを伝えるというのだ。まさかこちらに押し付けるつもりだったのか。手紙を書くのは面倒だし、ロマーニヤまで行く時間などない。したがってそんなものは鼻で笑って然るべき思考だと言えるだろう。

もつとも、新人は得てしてそんなことばかり考えている。これまでに来た数人も、やれ故郷の両親だの幼馴染の少女だのと、頭蓋骨が破裂するのではないかと心配になるくらいに考えて、悩む。教本の復習でもしていた方が、まだ無駄にはならない。

そんなものはテントで枕を濡らしてぼやいていれば良いのだ。

結局遺族に届くのはテントにある僅かな私物と、残っていれば識別票と、多少の額の慰問金がある程度だ。言葉でネウロイは墜ちてくれない。

遺書を書く度胸もないなら、引き金を絞ることだけに集中していて欲しい。これから戦場で優雅なピクニックに励む新人各位には、是非とも知っておいて貰いたいものである。

単純で生真面目なのが部下であれば、この女を指して言うには弄れなくて素直でない、といったところか。どのような回路を経由してしようと、彼女は部下の成長を賞賛しているのである。

他人を面倒と称して憚らない中尉殿こそ面倒な性格をしている。

わざわざ口に出してそれを指摘する者も居なかったが、基地の熟達の内では共通の認識である。上司が上司なら部下も部下、ひねくれ者の扱いは手馴れたものであった。

はてさて、しかし、未だ中尉殿との付き合いが半年にも満たぬカツサンドラにとっては、その捻くれた根性は幾分の苛立ちを持って受け取られるらしい。

少女は片眉を引き下げて口を尖らせた。

「だから、人の心を勝手に読まないでください！」

「私だって他人の遺言なんて読みたくないよ」

「まだ遺書には書いていません！」

「じゃあ書けば？」

これは全く、何ともすげない返答である。

大人気がないというのか、気が短いというのか。涙目の新人少尉はタリア・スミスという人物が偏屈であるということに今更疑いを持つこともないだろうが、ついでに狭量であるとも人物評に付け加えておくべきだろう。

擁護するとするならばこの時点での中尉は非常に寝不足である。というよりも常時睡眠時間の不足に悩まされている女性なのであるが、要約すると特別にこの日は不機嫌なのだ。主に生々しい事情によって。

大体にしていつもこんなものじゃないか、という意見もあるだろう。今は度外視しよう。

単に自分が死ぬかも知れないと怒るのは構わない。そうदैいて貰わないと困る。由縁のない全能感に駆られて猪突猛進、いくら命があつても足りるわけがない。十四・十五あたりの魔女にはよくあることなのだ。なまじ元の日常から抜け出せないから、非魔女との比較で自らが何か抜きん出た才能を持っているのだと錯覚する。

魔女も死ぬ。どう足掻いても魔力を持っただけの人間だ。

時折それを忘れる者が居る。レディはそういった意味で良い方であつた。

だからこそ、逐一気になるくらいなら早いうちに遺書の一つや二つは書いてしまえば良い。遺書の内容を気にして遺書が必要になるとは失笑ものだ。

死んだ時の備えをして、後はせいぜい生き残る為に必死になればいい。

「いや、意外と本気の話」

カツサンドラが細い眉を限界まで釣り上げたので、タリアは茶化すように言った。

頭痛腹痛その他諸々の不調に加えて騒音まで奏でられては堪らないのだろう。想像していただければ分かり易いだろうが、二日酔いの

朝、日頃は微笑ましい子供たちの甲高い挨拶が途轍もなく暴力的に思えてしまうことがあるだろう。彼女の考慮したことはその類だ。

「遺書のことですか？ それは確かに……」

「気になってどうしようもないなら、書きなさい。いや、今はマシだけどね」

今のところは、と。

微塵も悲壮な色の含まれない声がエンジンの唸りにかき消された。

この地域は比較的ネウロイが単純な方である。アフリカの中でも前線にありながら、何らかの機能に特化した個体が現れることは稀であった。機能特化型と自分は勝手に呼んでいるが、他の地域で報告される魔女の魔法に該当するような尖った能力を持つ個体、それが極めて少ない。

襲撃の頻度は高く、規模もそれなりのものであることを考慮すれば、驚くべき現象であることは理解している。今のところ具体的な要因が分からないから深くは考えないようにしていた。

然れども、好みの問題ではなく居るのだ。一種の殺意に溢れた個体というのは、一切の兆候もなく現れる。出現して、大打撃を与えて消えていく。

そんなものが現れたとして、その時に死んだ後のことを心配されては拙い。

「兎に角、道もないのに空で迷うのをやめなさいな。かつこつけて言うなら——迷うな。迷う暇があるなら撃て——みたいなもんよ」

「中尉が言っても様になりませんね」

「知っているとも」

気取ったセリフはマルセイユにでも任せておけばいいのだ。アレの方が余程似合っている。

中尉なら悪役の方が似合っていますよ、などと笑顔で述べてくれた者を食料調達係として砂漠に送り出したこともあったような気がするが、どうも定かではない。

格納庫に戻る頃には太陽は沈みきっていた。丁度夕焼けと夕闇が混ざり合う時間である。魔法の時間とはよく言ったものだ。認める

のは癪だが感動的な風景であることは確かだった。眺めて息をつく暇があれば嬉しいものである。

この土地にやってきた頃は、上司も居て同僚も居て、もっと楽だった。いつの間にかこんなことになってしまったのか。軍規違反を避けていたせいで貧乏籤を引かされ続けているのだ。

しかし処罰を受ける為に規則を破るのも馬鹿らしい。随分前に北に飛ばされたらしいビュースリングが羨ましいと思えてきたのだから末期だ。銃殺刑など死んでもゴメンだが。

上層部からの嫌われ方で言えばいい勝負なのが、また悲しいところである。

過去に遡ればタリアもタリアで色々やらかしていたりもする。当人は綺麗さっぱりと忘れているが、將軍へ攻撃的な文面の書状を送りつけたり、一時期金を巻き上げられた兵たちからの苦情が殺到したりと、悪評には事欠かない彼女である。

本部から派遣される士官が見事に戦死を遂げていくこともその一因として挙げられるべきだろう。この点に関しては彼女に非はないとしても、である。

更にそれに重ねること、読心の右眼の存在が邪魔をする。

等号イコールで出世は絶望的、という項式が完成されたわけである。

「中尉は、何か書かれたのですか」

「あん？ ああ、まあ」

「だったら」

カツサンドラが何かを言おうとしたのを、タリアの交差した人差し指が塞いだ。年齢にしては少々無理を押し通したような可愛らしい素振りである。誰が得をするのか。

「あのね、鍛冶屋の娘に正式な遺書の書き方なんて、分かるわけがないでしょう」

「う、いえ、それはそうかもしれないですが」

「一応あんたの実家、貴族でしょう？　なんか、こう、ないの？　ほら、高貴な作法みたいな」

そもそも自分はただの田舎鍛冶屋の一人娘である。最低限の礼儀

作法は一般常識の範囲で身につけていても、あまり格式張った物事は分からない。確かに軍のやり方で良いのなら問題はない。とは言え、家族に宛てた遺書が軍事的な報告書のようになってしまふのは、いくらなんでも味気ないだろう。

世に残る文化的なものを作り出すのは、大抵の場合名の知れた上流階級の人間だ。庶民に開発するだの研究するだのといった余裕はない。文字を覚えるより働け、といった風潮は港町を訪れてみると案外簡単に見られるものだ。

何が言いたいのかというと、高度な作法に則った文面など考えもつかない。

無学を隠そうと無駄な努力をする無為な時期は、彼女にとって既に過去のものとなっていった。端的に言えば中尉殿として以前は多少教養のあるような振る舞いをしていたのだ。

部下の中に本物の教養人がいたせいで、彼女の見栄は虚しく打ち碎かれることと相成ったわけだ。強がって知識のある振りをすると、結局肝心のところで役に立たなくなるという実体験によつて学習したのである。

ある意味で学術的な部分の知識においては、タリアはカツサンドラにすら劣りかねない。上流階級の人間が富を得るのには、権力があり元手があるからというだけでは足りない。それを生かすだけの、全くこれは知識・教養としか言い表しようのないものが、確実に蓄積されているからである。

レディはまたも唸つて首を捻る。一体どうしたというのか。

目の前で延々と牛のように鳴かれては、自分としても居心地が悪い。主に整備班からの、どうにかしてやれと言いたげな視線が痛い。何を期待している。三年前に水着なら着てやっただろう。

「……あの、あれよ。そんなに気張らなくてもいいじゃない」

「力を抜けと言われましても、無理ですよ」

「どうせ読まれるのは死んだ後でしょうに」

「私は中尉と違って責任感があるのです！」

責任感というのなら碌に貯金も作らず早死する方が不孝者だと思

うのだが、どうなのだろう。

どうしたものか。今日の書類は片付いている。部下の管理も上官の仕事であるのは、その通りだ。精神的な部分での処置も必要とあれば実行に移すのも吝かではないが、正直面倒になってきている。

眠い、頭が痛い、腹も痛い。嗚呼、やたら今日に限って萎れている新人にお薬を出して済ませてはならないのだろうか。駄目なのだろう。第一、この娘が上に入った状態など想像するに最悪である。反射的に上官特権を行使、銃に手が伸びるかも知れない。

タリアは懐を探り、アンプルが入っていないかつたことであからさまに溜息をつくとき、後頭部を搔いた。

「分かった。でもここで話すことでもないし、あんたのテントに行こうか」

「……相談に乗って下さるのですか!?!」

「仕事だよ。不本意だけど」

そこまで驚くか、と中尉殿はもう一度大きく息を吐く。

これもまた、日頃の行いが成した結果である。自業自得とまではいかないが、普段から人に優しく親切に接していれば、もつと違う反応もあっただろう。

人の感情というものは伝播するものである。顰め面を前にして気分の良い人間は少ないだろうし、幸せそうな者を妬むことはあるだろうが、それもその状態が好ましいものであるという前提に基づくものだ。

タリアの決め事に行っているような仏頂面は一般的に言って損である。加えて本人の性格も捻じ曲がっているのだから救いがない。

いくら見目には美しい範囲であっても、大概そんなことなのだから嫌われる。扶桑の諺で言えば情けは人の為ならず、その真逆だ。

カッサンドラのテントは清潔で、整理整頓が行き届いていた。部屋の内装は人柄を表すという説もあるが、正に少女の細々として神経質な雰囲気ニュアンスが現れていた。どこかの誰かも須らく見習うべきであろう。

「あの、中尉。遺書って何を書けばいいのですか?」

「無難に財産の扱いでも書いておけば? 金は便利だけど面倒事の

元。扱いはきちんとしておくに越したことはないでしょう」

「はあ」

「たぶん上等な保険に入っていると思う。念の為だよ」

ランプの灯りで照らされた便箋に丁寧な文字が連なっていく。残念なことにロマーニヤ語は分からない。生返事から察するに。恐らくは勝手にしてくれ、好きなように、そんなところだろう。

貴族様の保険金というのはどれほどの金額になるのだろうか。庶民の自分には想像もつかない。下手をすればこちらが稼ぐ一生分の給与にも並ぶのかもしれない。

不平等である。当然である。平等などというものは、突き詰めたら誰もかもが同じ顔をしていなくては我慢できないということだ。気色が悪い。

「他には」

彼女が関係のないことを考えている間にカツサンドラは万年筆の先を止めていた。

「ああ、そうね。何か……言い残すことは？ あんた、下の兄弟に言いたいこととかないの？ 可愛い弟と妹でしょう？ 姉上が居なくても強く生きるのよ、みたいに」

「急に言われても思い付きません……」

「じゃあ、ほら。墓には何を供えて欲しいとか。いや、柩の中身は空かもしれないけどさ」

躊躇うようにペン先が漂い、一分が経過したところで少女は筆を置いた。

カツサンドラの視線は机に落ちている。だが紙面に集中している様子ではない。きつと、彼女の瞳はそこにはない何かを見つめている。頭蓋の内側で瞬く恐怖や不安を凝視して動けなくなっているのだ。

掠れた高音がタリアの名を呼んだ。

「スミス中尉は」

「ええ」

「何と書かれたのですか」

聞いてどうするのよ——とは彼女も口にしなかった。

タリアは机の傍から離れ、断ることもなくカツサンドラのベッドに腰掛けると、組んだ足の上に肘を突いて天幕の入口から覗く三日月を眺めた。

何故かその光景は淋しく、可憐であった。

「何も」

偉そうに語ったが、自分もいざ書こうとして中身が思い付かなかった。

溜め込んだ金はあくまでも自分の為のもので、死んだ後にどう扱われても知ったことではない。

兄弟は居ない。両親は居るが何を言ったものか。家を追い出されたようなものでも、自分から抜け出したようなものでもあった。実家を出た時には殆ど考えというものはなかったのだ。

今更反省も恨み言もない。気遣いをする程殊勝な性格でもない。

遺書として用意した便箋はあるものの、未だ紙面は白紙だ。

レデイがどうしてか、安心した風に肩を落とした。

「白紙でもいいのですね」

「——ええ、そうね。白紙でいいかもね」

そして眉間から陰が抜けたのはタリアも同じことであった。

形のない物質が溶けたような変化であった。彼女は手のひらで目を覆い、小さく項垂れた。脱力して、瞼を伏せる。安堵した様な、とは彼女にも言えることであった。

「じゃ、そういうことで。私はもう行くけど、いい?」

「あ、はい」

部下の管理は上々、悪くない結果に終わったらしい。

自分のやることはもうない。取り敢えず飯を腹に詰め込んで仮眠を摂らねばなるまい。

立ち上がり、テントを後にしようとしたところで声をかけられた。

「あの、中尉」

「何?」

「その……ありがとうございます」

タリアは無言で手を挙げ、パイプ煙管を口に啜えた。

酒とズボン

誰に言うでもなく思うことだが、砂漠は暑い。ブリタニアに比べると暴力的なその日差しは、慣れない人間に気の毒なほど害を為す。自分も最初に配属された頃は肌が焼けて、皮膚が剥けて、泣きそうになったものだ。

その時と比べると随分日に焼けて、世間に揉まれて、知らぬ間に人は大人になるものだど気付く。年を食ったようで気に入らないが、ふと冷静にそう思う瞬間があった。

レディなどはよく泣き言を言わなかったものだが、何を思っていたことやら。知っているがからかう程の事でもない。

現実逃避はここまでとして、目の前の副官に向き直る。

「それで、増員は？」

「いえ、延期です」

「……ストームウィッチーズは」

「ご存知でしょう」

タリアは煙草の煙をペン先にふきかけて肩を落とした。

彼女と同じく、天幕の下で副官も面倒そうな顔で首を振っている。彼としても上官の機嫌は気になるところだろうし、同時に現状の不遇を思えば自然だろう。所属する魔女は二人、片方は熟達と老兵の間の綱渡りで、もう一人は実戦経験が半年にも満たない新人である。少々安心感に欠けていると言わざるを得まい。

太陽が直上に輝く真昼のことだった。物資と共に受け取った書状の文字に、部隊の管理を行う二人は額を突き合わせて唸っていたのである。

慢性的な人員の不足、物資の不足、軍には付き物である。

だが幾ら普遍的なものであるとは言え、現場で戦う者たちにそれを甘受しろと押し付けるのは不配慮が過ぎよう。戦争などというものは、銃を担ぐ者にとって最も不利な賭け事である。親となり利益を得るのは何時でも商人か、それとも国家か。

ともあれ、数十万分の一の命など目にも入るまい。それは非情の成

すところではなく、必然である。

指揮官は、この場合実際に総指揮権を有する者たちは、それを恣意的に無視しているのだ。同情で勝てる戦はない。優先度の示す通り、冷徹に裁定を下し最良を目指す。それこそが求められる大局的な判断というものだ。

物資はまだ足りている。レディの配属は未だ有効な手札として手の内にある。

問題は人間だ。今回は人員が足りなくなってきたのだ。

確かに自分を含め、この陣地で戦う連中は戦場に慣れてきている。それは良い意味でのことだ。油断をする者を嗜める存在も確実に育っている。新人卒業祝いに砲火を頂く者は少ないと、報告できる程度になってきている。素晴らしいことだ。

しかし無いものは無い。勝手にそこから兵士が生えてくるなら、無論質の悪い冗談の域だが、さりとてその程度の超常現象の発生を望むくらい、真剣に拙い。

唯一と言っても良いこの部隊の取り柄は豊富な砲兵——砲台である。

地上型のネウロイ撃退は当然として、時に空戦型にも牽制程度の効果を期待して使うことはある。臨時指揮権を賜っているからには有効活用をするしかない。

ここで日曜学校に通う鼻の垂れた餓鬼でも分かる質問をしよう。

大砲は如何にして自己の赴くままに砲弾を吐き出さん。

答え、そんなことあるわけがない。

火力を活かそうにも、砲手が居ないのではやりようがあるものか。教導すれどもモノになるが早いか死ぬが早いか。一度の増員が延期になっただけで火の車だ。

単純に数を見れば問題ないが、技能などを慮ればのんびりと構えてはいられないのだ。

こういう時には無性に酒が飲みたくなる。強い酒だ。そう、スコッチが良い。

「副官さん」

「ダメです」

「今から真面目に仕事をしようと思ったのに、そうですか。ダメですか。よし、なら——」

立ち上がろうとしたら、思い切り頭を押さえつけられた。乙女の髪に気安く触るとはとんだ紳士も居たものだ。

報告書やら陳情書やら、その手のものを弄ぶのは慣れていても嫌いだ。

苦手ではないのが悩みもので、結局やってやれないのではないから始末が悪い。

「そんなことをするからパパ臭い、なんて娘さんに言われるのですよ」
汗臭い、オヤジ臭い、などと成人男性の急所を抉りながらもタリアは書類の束に取り掛かる。汗の臭気に関しては彼女とて他人に指を指せたものではないのだが、自覚はないらしい。大抵の場合、深刻な脇臭症についても、隣人に指摘されて始めてそれに気付くというのが現実である。

彼女の場合、部隊のほんの一部に限るが、究極的に最終的な紳士の局地へと至った男性陣によって好意的な評価を受けているというどこまでも下らない事実があった。それ故に、しかし何故か、かの女性の放つ芳香においてそれを口に出すものは少なかつたのである。

勿論彼女も察する部分はあるのだろうが、自覚症状が少ないのだから対応も適当おぎなりなのだろう。その辺りの変態マニアック的な趣味嗜好については考えないことにしたのかもしれない。

それとも、どうだろうか。自らの体臭を感知する程近寄る者が居たとして、それが如何なる意味であれ、好意的なものであると思われることだとしたら——自称乙女の女性としてはどのように受け取ることだろうか。

生まれてこの方、間違いなく異性に言い寄られるという経験をしたことがないだろう中尉殿である。未知の領域に関して素人が考える物事というのがどれだけ飛躍した論理を展開するのかなど、今更強調するまでもなからう。

そう、彼女が非常に愉快的な思考をしている可能性も否定できない。

だとしたら下世話にも実に胸の踊ることである。

書類が勝手に内容を読み上げて、ペンが自動的にサインを書き込んでくれたならどれだけ楽だろうか。考えたことを直接読み取り、文字にして印刷してくれるタイプライターなど発明されないのだろうか。是非とも発明家には努力していただきたい。

機械仕掛けの箒を開発したという男性など、そういった方面に進んでくれはしないだろうか。無理だろう。

面倒である。仮眠を摂りたい。どうやっても一日二日眠っても万全の体調にはならないだろう。それでも休暇のひとつやふたつ、認可してくれても良いはずだ。

サインを書き込んだ紙を文箱に滑り込ませ、肩を回す。

改めて思うに、自分——タリア・スミスという人間ほど勤勉な者がどれだけいるだろう。怠けたいところを我慢し、滅私奉公、人類の為に日々戦い続けているのである。

何も兵士に限った話ではない。一般人を含めても、これほどに一所懸命働く乙女は居るのだろうか。いや居ない。

論理的に考察して、自分は休息を許されていると言っても良いだろう。否、それどころか神に休憩せよとお言葉を承って然るべき境遇だ。

「——酒」

「ダメです」

酒が必要なのである。

アルコールを廃するという人間は、浅学を恥ずるべきだと言える。まず酒類を摂取することによって生まれる経済的な要素を考えに入れていない。酒には比較的多額の税が課せられている。ということとは、アルコールを禁ずるとするのは明らかに国家の財政へと打撃を加える意見なのだ。

総額がどうあれ、収入源の一つを封じる。それが即時的な経済への影響に留まらないことは明白である。一度廃止したものを再度復興させるということは、存続させるよりも多くの資産を必要とする。

またそれが嗜好品であったとしても、質の良いアルコールを生成す

る技術は捨てがたい。医療と酒精の関係は遙か昔へと遡って語られるものだったと記憶している。要するに一側面を見て全体を否定するというのは、そのものに含有される大きな利点をも容易く潰してしまふのだ。

最後に娯楽としての存在であるということ。これは戦場において、何物にも代え難い重要な働きである。賭博、薬、そして花売り、どれも危険はある。だが薬よりも幾らか安全で、賭博ほど金は飛ばず、その手の接触によって妙な病が流行ることも（依存性を除き）ない。

安価で手に入る娯楽品なのだ。これを否定して強固な部隊を築くことは、困難を極めるだろう。兵として時には羽目を外したい時もある。しがらみを忘れて騒ぎたい、そんな時に何よりの友となる酒。神は人に天使の代わりに酒を与えた。

再度の確認となるが、タリア・スミスはアルコール依存症寸前の女である。彼女の述べた酒精賛美歌が、全くもって個人の意見と偏見と屁理屈に塗れたものであることは、まず間違いないだろう。

そんな駄目人間丸出しの女は何かを勘付いたのか片眉を下げた。

「スミス中尉!!」

仏頂面に出迎えられたのは、部隊の顔として絶賛売り出し中のカツサンドラ・レデイ少尉であった。彼女のブロマイドは既に制作され、近隣の市街にて販売中である。

その写真が自らのものより良好な売れ行きを見せていることが、またタリアの機嫌を多少悪化させているのだが、当の本人は全く知らない。写真の使い道も知らない。

「ああ、良かったですね。今回はアタリ」

レデイは一人の若い男を引っ張って連れていた。ブリタニアの兵である。彼は拙いことになったとは露とも思っていない様子でこちらを眺めている。

これで三度目である。扶桑の言い回しでは三度目の正直という。

この新人はズボン窃盗犯を捕まえたと言って、テントに踏み込んでくること二回、誤認であった為に頭を下げる羽目になったのも二回である。

「どうですか。私だってやればできます」

「そうね。うん。今、仕事しているのよ」

「つきましては処分を如何しましょうかと」

話を聞きなさい——と、それでもタリアはペンを置いた。

カツサンドラもこの時点で上司の扱いを心得つつあった。面倒くさがりで性格は悪いが、押しには弱い。意見をはねつける労力を厭うて、諦めて話を聞く方向へシフトするタリアの癖を、少女は無意識の内に理解しているようだ。

カツサンドラを宥めつつ、タリアは今のうちにと酒瓶に伸ばした手を叩かれた。

「……まあそれで、あなたが犯人ということはもう分かっていますけど、何か申し開きは？」

「いえ、申し訳ないと。つい出来心で」

「そう。お嬢さんテイは？」

レディはうんと唸った。

「いえ、まあ本人が反省しているというなら、盗んだものを返していたただけで」

「あんた、正気？ いや、それでいいの？ 本当に返して貰いたいの？」

成程、この娘は純粹培養だ。上流階層の尊き教育の賜物だ。

ズボンを使ってこの若き兵が何をしたのか知らないのだ。嗚呼、如何に伝えたものか。純情な乙女を前にしてたじろぐのは勇者のみならず。

いや、思えば自分とて固有魔法がなければもう少し疎かったかも知れないが、このままズボンを返却させて終いとするのは、良心が咎める。

白状するが、そういった視線が自分から逸れたことで気が楽になった節はあった。

だからある程度放置していたのだが、どうしたものか。現状人員を減らすことはよろしくない。営倉送りは得策でない。ならばどうするか。

タリアが顎に指を当てていると、副官が口を開いた。

「では特務課へ編入しては如何でしょう」

「——ああ、その手がありましたね」

「特務課……？ そんなもの、ありましたか？」

「私が作った懲罰みたいなものよ。通常の任務に加えて特別な任務があるっただけ」

この若者は間違いなく同じことを繰り返すだろう。内心では全く悪いことをしたとは思っていない。返す時に要らぬ世話を焼こうという思惑すら見えている。

それならば痛い目を見て改心して貰わねばいけない。

「うん。ではあなたには特務課への編入を命じます」

「は。了解しました。それで、特務とは？」

タリアは副官に目配せをした。中年は頷くと足早にテントから退出し、数分後に小袋を手に戻ってきた。

娼妓を有する部隊は、少なくともこのアフリカにおいては少ない。魔女への一般兵の接触には、割合は不明であるが、そういった恋愛感情以外の思惑が含まれている場合もあるということは否定出来ないだろう。

そこでタリアたちは考えたのだ。

代用品を用意すればいいだろう、と。

「そこにグリセリン軟膏が入っています。適宜使うように。勿論、日中の通常の任務にも参加してもらいます。よろしいですね？ その他の備品は詰所に」

「はっ……え？」

「まあ、そんなに利用者は居ませんので頑張ってください」

「ま、待ってくださいよ！ そんな横暴が——」

銃声はその抗議を掻き消した。

事情を察してタリアに詰め寄ろうとした男の足元に、二つの弾痕が穿たれている。

机の下から平和の使者を抜き、撃つたのが中尉だった。肝を冷やして硬直したのが若い兵と——ついでにカッサンドラである。

「私のズボンも盗んだでしょう。ついでに夜中に同僚の財布から金を摺った。新兵に脅しをかけて金を巻き上げたね。訴えがなかったから見逃したけど」

「い、いや、それは」

「四の五の言わずにさ。こっちの銃と、そっちの銃。ぶち込まれるならどっちがいい？ 重要なのはそれだけだよ」

どっちでもいいよ、とタリアは息を吐く。

心底気怠そうな表情である。溜まった書類を片付けることに疲れていたところに、これである。彼女もいい加減処理してしまいたくなっただろう。

その行動の効果は靦面だったらしく、青年はすっかり大人しくなつて身を縮こまらせた。無表情に近い彼女の顔が、口を聞けば頭を打ち抜くとも言いたげに見えたのだろう。眼帯と相まってやくざな外見であった。

「なら決定ですね。副官さん、お願いします」

副官が兵を連れて行ったので、肩の力を抜く。もしあの上で反抗されたなら、撃たねばならなかっただろう。それが義務だ。幾ら人員が足りないとは言え、放置しすぎたのかもしれない。

第一、日頃から威厳のあるように振舞っていればもう少し楽に話が収まったのだろうが、残念ながら常時締め付けて機能するほど上等な連中ではないのだ。

すかさず酒瓶を開けて直接喉に流し込む。適当に取った瓶はワインだった。デキャンタージュもなしに飲んだので舌に澱の独特の感触がする。どうやら勿体無いことをしてしまったらしい。

「中尉……私、気付きませんでした」

「は？ いや、何が」

何故か悔恨の表情を浮かべるレイディである。

気付かなかったというが、それはもしかしてあの若い兵士のことだろうか。自分は眼のおかげで読み取れたが、何の固有魔法もない者が感知することは不可能だろう。

気にするようなことではない。

困惑するタリアに、カツサンドラは畳み掛けるように言った。

「あの人が銃を隠し持っていたなんて、どうして分かったのですか？」

「……あ、ああ。成程。そっちね、うん」

どう言えというのだ。

否々、まさかここで一般的な人体の発達と男女の性差を解説しなければならぬのか。いや、流石にそれはお嬢様も知っているだろうが、先程の下品な例えを解説しろというのは拷問ではないか。

「それは、そうね。うん。そう、あの……人体の神秘？」

「はあ。それでどこに隠していたのです？ ポケットなどではないですよね」

「ああ、いや。それはねえ」

股間に、などと言えるわけがない。貴族の教育はどうなっているのだ。もう少しやりようというものがあるだろう。この娘とくれば立ちんぼすら見たことがないときた。

苦肉の策としてタリアが選んだのは、逃避であった。

話を逸らす。それしか彼女の良心を刺激せず、そして羞恥心を掻き立てない対応はない。

「——まあまあ、それはね。追々勉強すれば分かるようになる。答えを最初に教えられるクイズなんて面白くないでしょう」

「そうですね……確かに、一理あります」

「そうそう。ああ、思い出した。あんたの実家、政府にどれくらい干渉できる？ 支援が欲しいから、ちよつと頼めないかな」

またもや唸り始めたレディだが、こちとら心の中はお見通しである。ある程度の影響力を持つことは知っているし、駒として長女はそれなりに有用だ。戦場でその命が浪費されることは望むまい。

跡取りでなくとも横の繋がりの為に娘は使える。好都合にも魔女だ。容姿は良いし、軍へのコネクションを築くことも彼女の両親は見通しているだろう。

それはそうと、疲れる質問攻めからは抜け出せた。

力を抜いて、デキキャンタを取り出す。せつかくの酒だ。旨く味わうに越したことはない。

タリアはそのように酒瓶を傾けたが、目の前には口煩く規則に喧しいことで有名な少女が居る。そしてそういった人間は、得てして空気を読むということを知らない。

取り敢えず、中尉殿がワインを楽しむのは数時間後のこととなりそうだった。

重石の骨

「ああ全く、あんたはどうして忙しい時に限って面倒事を持ち込むの」
「人を厄介者トラブルメイカーみたいに言わないでください。中尉、そもそも飛行脚の整備が満足に出来ないという時点でおかしいのです。普通は最低限そこだけでもまともにしておくべきでしょう」

「分かった、分かった。私の力不足だから、早いところスペアを選んできなさい。飛行訓練は自由にしていいから」

事の発端はつまらない機体の故障だった。

訓練中に黒煙を上げたレディの飛行脚は徐々にその力を失い、オアシスに不時着してしまったのだ。幸いにして速度が死んでおり、それなりに口煩い部下も操縦に慣れてきていたので怪我はなかったのだが、慌てて遙か上空に突き抜けていくような甲高い悲鳴を上げていたのが面白くて仕方がなかった。久々に胸のすく思いをしたというのは秘密である。

それはそれとして、通常これは整備班の不始末となるのだが、備品が不足していたことは分かりきっていたことである。むしろ今までよくぞ何の支障もない程度まで仕上げていたものだ、と評価するのが優れた指揮官というものだ。

自分が大笑いしたのですっかり膨れてしまった堅物の部下は放っておくとして、問題は整備班の設備をどうにかしてしまわねばならないということだ。

実は最近と言わず、タリアも徐々にカツサンドラ・レディという少女のことを内心で認めるようになってきている。

何といってもカツサンドラがこのみすぼらしい基地に配属されて、半年が過ぎようとしているのだ。多少なりとも出来る部分を見せていなければ、可能か否かはともかく本国に送り返されても仕方がない頃合だろう。

端的にはカツサンドラが単独で飛行脚の訓練を行うことを許可している点や、不意の事故にもある程度対応してみせると考えている部分である。流石の彼女も大怪我に繋がるような事態において、部下を

笑いものにするようなことはない。ないはずである。

彼女が口に出すことはない。だが悪評は多くとも、部下からの信頼はそれなりに厚いには相応の理由があるのだ。

つまり中尉殿を的確に表すとすれば、性格は悪いが決して悪党ではないといったところなのだ。そんなわけだから、嫌がられるが嫌われはしないという絶妙なバランスをもって、慕われたりズボンを盗まれたりしているのである。

カツサンドラとて怒りはするが、嫌っているわけではない。中尉の注意に訂正を加えることはあつても反発することは少なかった。正しくは少なくなっていた。

少女は了解しました、と短く答え、すぐに首を捻った。

「前から思っていたのですが、どうしてこの基地にあんなに飛行脚があるのですか？ 部品が不足しているのに本体がある、というのもおかしい話ですが」

「そりゃ遺産に決まっていますでしょう。あんたの前任者たちの残したものだよ。普通は本国に引き取られるところに無理を言つて貰つたの」

無理を言つたというか、脅しをかけたというか。

過去のことなど今更気にしても仕方がない。大体、誰が咎めるといふのだ。そもそも、何処の国の連中も下手に現地妻など作るから弱みを握られる。自業自得である。

相手が脳足りんであったことが悪いのであつて、自分はそれを許諾し、喉の奥に留めておく正当な報酬を得ただけなのだ。

お題目には事欠かない。地域の防衛任務の為、弱卒を送っておきながら物資だけ掠め取るつもりか（これは食料や宿舎を指してのことである。要するにいちやもん）等々いくらでも並べ立てることができた。

思うに男連中というのは、そこまで女を囲っていたいものなのか。

金が掛かるだけだ。ついでに手間と時間の浪費までもが付いてくる。家庭崩壊の危機を招くことを考えると、面倒事の出血大サービスと言つたところだろう。

断言してもいいが、上手い商売女というのは自然と男の理解者であるかのように振舞うものだ。しかし財布の中身を見ればよく分かる。最低でも数人の客を取っているのが現実である。私有財産ではなく公共の宝石なのだ。時として病を伝染させてくれるのだから、全くありがたい話である。

そんな浅ましい事情を悟らせないからあの手の連中は侮れない。近隣の町で協力を呼びかけても安い、の一言で黙らされた。あの時対応をしてくれた、如何にも婀娜っぽい女は鼻欠けにでもなっていればいい。

「ああ成程。しかし、確かその方々は」

「まあ、大半死んだね。随分前になるけど」

カッサンドラの前任としてやってきた扶桑の新人は二ヶ月で死んだが、その前には経験のある魔女も所属していた。タリアの顔は僅かに苦々しく歪む。

いい記憶ではないだろう。それは、彼女とどのような関係にあったかは別として、僚機が落ちたということだ。

宿舎は離れていたかもしれない。

もしかすれば仲も悪かったのかもしれない。

だとしても、戦場を共に駆けた人間が、その多くが命を落としたということとは軽くない。

少女は上司の複雑な心境を察してか、ひと時の沈黙を選んだ。

「何。らしくもない」

「そういうことを言うから中尉は嫌われるのですよ」

タリアの口がひん曲がった。

元を辿れば彼女がカッサンドラに何度も言っていたのだ。その手の、自業自得であるといった旨の指摘は、読心の可能な中尉殿の専売特許のようなものだったのだ。

それがここに来て逆転した。何ということだろう。正しく親愛なる中尉殿にとっては青天の霹靂、小娘にしてやられたということである。

数年も近くで過ごさなければ性格など理解できないだろうと思わ

れるかもしれない。だが、限定的な話ではあるが、日常とは掛け離れた場所で、通常に予想されるよりも遥かに密度の濃い日々を送っていたなら、その信頼関係のような何かは想定を超えて深まっていくものだ。

軍隊というものの、或いは兵士という者たちは、言うなれば非日常を平凡なものとして通過せしめることを理想像として描かれる存在である。緊急時に慌てることのないよう、もしくは日常的な戦闘による緊張状態を少しでも和らげることが可能になるよう、彼らは訓練し鍛錬する。

隊員は家族だ、などと口にする教官も多い。それほどに集団内部における連帯感というのは重要かつ不可欠なのである。

そんな事情があるので、強情な部下とていつまでも上司の性格に無知では居られなかったのだ。タリアとしては不愉快というよりも機嫌の悪いことだろうが、彼女の言葉を引用するなら、それほど分かり易い性格をしているのが悪いのだ。

「全く、前の子はもつと素直だったのに」
「ですがその方は」

「他人のことはいいの。あんた、最近熟こなれてきたからって油断なんてしないようにね。こういう時が一番危ないのですよ」

わざとらしく敬語を使つてやると、レディはこれみよがしに眉を顰めてくれた。素直というよりも正直な部下を持ててまことに光栄である。

ただ、新人が晴れて新人扱いされなくなる時期が危険であることは事実なのだ。最初の緊張感が抜けてしまい、無意識の内に取り返しのつかない失敗を犯す。戦場に慣れてきたからこそ人間の過失が生まれるのだ。

せつかく、である。

タリアは一度唇に親指で触れ、鼻を鳴らした。

彼女としては折角ここまで生き残ったのだから、といった考えを持つていたのかもしれない。結果としてそれを口に出しはしなかったが、彼女が何事かを思い浮かべて振り払ったことは間違いない。

生き残ったと、ほんの半年の従軍経験を大仰に称したであろうことは彼女なりの思惑があるのだろう。

傍若無人に見える女性であるが、他人の心には他の誰よりも敏感にならざるを得ないのだ。賞賛の言葉が直接音声でなくとも届くように、罵倒や恨み言、どのような原因であれ憎悪の感情もその固有魔法が常に受け止めてしまう。

不快な想いをすることも多いだろう。

だというのに、一切行いを改めないのだからこの女も救いようがない。何を考えて積極的に敵を作るような真似をするのか。真実は彼女の豊満な胸の中、であった。

これは珍しい光景ではないのだが、カツサンドラの目線がじりじりと恨めしく中尉殿の鎖骨の下に突き刺さっている。

気の毒にも十五歳という年齢は、女性として既に二次性徴を終えた年頃だと言える。残酷な話だ。人間には人間として然るべき健全な成長段階というものがある。この先神経質な眼鏡の少女が胴体上部を保護する防具を拡張する、その可能性は低いと言わざるを得ないだろう。

どういった思考があるのか、引き締まった体格をしている少女は呟いた。

「中尉は」

「何よ」

「どうして志願されたのですか。別に、食べることに困っておられたわけではないでしょう」

何を参考に腹を減らすことがなかったと判断したのか、追求してみてもいい。

当然、無駄に機嫌を損ねることもないので思うに留まっておくが、大体この娘はこちらが心を読めるということ忘れてはいないか。

この半年で随分この小娘も自分を舐めるようになったものだ。

侮ったというか、買い被っているというか。

まさか自分が国や市民の為に立ち上がったなどと期待される日が来るとは、思いもなかった。

夜間哨戒に向けて仮眠を取ろうか取るまいか、タリアがそんなことを考え始める夕方のテント内である。

女はやけに不機嫌そうな面をして、少女は嫉妬丸出しの目をしていた。

大きな溜息を吐いてタリアは仕入れた巻煙草に火を点けた。

「あんたが……私のことをそこまで買ってくれているとは嬉しい限りだけど。もつとつまらない理由だよ。楽に暮らしたかったの。最初はね」

「楽って」

「まあ軍に入ってから馬鹿だったって気付いたよ」

本当に考えなしだったのだ。

実家を継ぐにも女の身では厳しく思えだし、ならば手伝いだけやっておいて暇な時間は寝ていればいいかなどと考えていけば両親に怒鳴りつけられ、畜生めと勝手に軍の募集に応募し受かってしまった。

訓練は苦痛ではなかった。やることをやっていけば、後の時間寝ていても文句は言われなかったのが、実家と比べて気分が楽に思えたからだ。

そう、当初は言い伝えにあるような魔女も中には居るだろうと踏んでいたのだ。そんな感じの連中に前線は任せておいて、自分は適当に事務方に回って内地で勤務しようと思論んでいたのだ。

——そのはずが初端から前線に送られてしまい、気付いてみれば戦況は悪化する一方、徐々に同期の内でも戦死者が出始め、よくよく情報を整理してみればガリアもカールスラントもぼろ雑巾になっていた。

以上のことから大失敗と分かった時には、既にアフリカに居たのである。言うまでもなく手遅れであった。

「中尉、あの、言い辛いのですが」

「言わないですよ。分かっているから」

所詮は下町育ちの教養もない女なのだ。

タリアは自分のことを卑下してそのように称するのではない。真実、その経験から自身がそこまで頭がいい方ではないと考えているの

である。

カツサンドラの視線も何やら同情的なものになっていた。

「でも引退はされないのですね」

少女は小さく口元を緩ませていた。

安心感に基づくものだったのか、それともからかいだったのか。

敢えて真意を問うことはせず、タリアは口を閉ざして書類に目を落としました。

照れ隠しのようにも見える。可愛らしいと思う人間がどれだけいるかというと、それは知れないが、二十三歳の女性はそんな仕事をしたのである。

「しかし、各地で統合航空兵団が戦果を挙げていますし、アフリカでもストームウィッチーズの活躍がありますからね。きっとこれから人類の反撃になりますよ」

「……そんなわけではないでしょう」

如何にしてか、その一言は場を綺麗に鈍色の空気に染め上げた。

冷え切った声色で、それまでの暖かくも思われた会話を塗り潰すような言葉であった。

「そんなわけではないって」

「あなた、学はあるでしょう？ 歴史とかさ」

「ここまで何も考えていなかったとは、これは自分の失敗かも知れない。」

もう少し長く会話をすべきだったのだ。このお嬢さんは、現状を全然理解していない。

ガリアは奪還された。アフリカも多少前線を押し上げることになった。それは正真正銘人類が成し得たことだ。戦績で、戦果だ。

故にそれが目を曇らせる。何か決定的な一撃を与えたのだと、実体的ない希望を抱かせるのだ。

簡単な足し算と引き算の問題だ。人類がネウロイの侵攻を受け始めてほんの数ヶ月で失った領土と、この数年で取り返すことのできた領土、どちらが多いかなど子供にも分かる。

消えた金も消えた町も消えた命も、何一つ取り返してなどいないの

だ。人類がその手に取り戻したものは、ただの土塊だ。何千万の命を消費して、たかだかいつも当たり前前に踏みつけている地面を奪い返しただけで喜んでいいるのだ。

意味はあるだろう。徒競走に例えればいい。人類は全領土の奪還に向けての助走距離を得たのだ。最終目的へ至る一つの柱を建てたのである。

然ればこそ、その第一歩を踏み出すだけで息切れをしているのに、何の勝ち目のあるものか。

「聞きたいけどね。未だかつて、相手の正体も分からないままに勝利した戦争があった？」

カツサンドラは沈黙した。

小規模の戦闘ならば、勝利も有り得ない話ではないだろう。

ならば国家間の争いにおいては、どうだろうか。

彼女はそう言っているのだ。

「推定される敵戦力は。目的は。大体、あいつらは何者なのか。それすら誰も分かっちゃいない。でしょう？」

「それは、そう、ですが」

「いい、よく聞きなさい」

中尉はテントに彼女とカツサンドラ以外の人間が居ないことを確認し、声を潜めた。

「理由なんて魔力が減衰したと言えればいいから、早目に引退しなさい。稼いだ金でそれなりに暮らして、人類がどうか、国の誇りがどうか、そんな難しいことは無視しなさい」

「ですが！」

大声を上げた少女にタリアはいいから、と静かに言い含めた。

それは彼女の後悔なのだろう。カツサンドラ・レディを自らの基地に招くことを選んだのはタリアなのだ。死に最も近い戦場にうら若い少女を導いたのは紛れもないブリタニア空軍中尉、タリア・スミスだった。

矛盾しているかもしれない。だがそれを弱さと呼ぶのは、余りにも情に欠けている。

彼女が受け入れずとも、カツサンドラは他の前線に送られていただろう。

しかし、如何なる選択肢があつたにせよ、常に不機嫌で、不親切で、性格の悪い中尉殿は不義理にはならない程度の責任を感じていたのだ。

最早、これを茶化しはすまい。優しさか、憐憫か、その根源は問わずしてタリアは年下の少女を、軍人としてではなく単純に普通の人間として気遣っているのである。

気を配つて、諦めろと告げているのである。

「結果はもう決まっている。でも、一部の化け物みたいな連中が輝かしい戦果なんて上げるから目が眩むの。お分かり?」

「そんなこと、どうして」

「見れば分かるじゃない。アフリカは、まあいいでしょう。他の地域で人間は何をやっている。協力なんて上辺だけ、戦後の取り分を必死に確保しようとしているよ。相手が何なのかも知らないのに」

馬鹿馬鹿しい。

本当にそんな調子で、戦争をしているつもりだから下らない。自分として戦意旺盛とは言えないだろう。熱心な兵隊ではない。ならば、そのような上層部の為に死ぬ義理もない。

じゃあ、とレデイの声が震えた。

「なら、ならば、どうして中尉はここで戦っておられるのですか?」

「それは——」

タリアの口が何度か上下に動き、閉じる。

彼女は迷っているのだ。率直に言つてよいものか、それとも黙つておくべきか。

「そんなものは、成り行きだよ。それだけだよ。どうしようもないし、行き場もないからここにいる」

「——分かりました。では、私は飛行脚の選別がありますので、失礼いたします」

冷静になったものだ。

驚くばかりである。この基地に来たばかりのレデイなら、噛み付い

てきただろうに、本音を飲み込んで腹に据え置いて、引き下がった。気を遣われるほど、自分の顔は酷いらしい。

机の引き出しから手鏡を取り出す。長く覗くことすらなかった。

「成程。酷い顔だわ」

目の隈が真っ青で、頬は痩けて、髪は適当にナイフで切り揃えただけの化粧つけのない見た目だ。

薬物中毒の患者のようだ。ひどい、ひどいと言えないうい。

こんな顔になるから早く国に帰れと言っていけばもう少し受け入れられたのだろうか。

本音を言えば納得したのだろうか。

人が死ぬ間際の心を読むのは嫌なのだ。

自分の肩に遺骨が積み重なっていくのは、もう嫌なのだ。

真っ直ぐに伝えていけば良かったのだろうか。

タリアは一人で首を振った。

そのせいでこの女は独りなのだというのに。

輝けるもの

「レディ！ カツサンドラ・レディ少尉！」

タリア・スミスが苛々とした声を上げたのは、彼女とその部下が忙しい出撃から帰還して、仮眠から目覚めた夕暮れ時であった。往々にして不機嫌な顔が張り付いているような女ではあるが、怒っているという程に声を荒げることは珍しい。

とりあえず未だ二十代であるからして、更年期障害という可能性は否定できる。気が短い女性でもない。平時のタリアは不親切に見えるし、時として意地が悪いように見える言動をすることもあるが、恐らく人格として性悪というわけでもないだろう。

彼女の呼びかけに対し、そばに控えていた男は顎髭を親指で擦った。

「あの、中尉。どうされたのですか？」

「どうもこうもありませんよ、副官さん。あの神経質が勝手に掃除をしたおかげで、書類がどこにあるのか分からなくなっているのです。ああ、なんでこう余計なことばかり！」

上官の机を無断で弄るとは何たることだ。

これは別に、自分が掃除を怠けていたということではないのだ。

日々使い慣れていている仕事場だからこそ、どこに何が置いてあるかということは把握している。大抵のものは目立つように配置する上に、その場所を間違うという事態は稀である。当然だ、自分で置いた位置を忘れるなどという程年をとった覚えはないのだから。

だが、領かざるを得ないことは、確かにある。

極々稀に、それこそ天文学的確率の上で書類箱が行方不明になったり、使い古したペンが自ら出奔したり、インクの瓶が転がってしまったりすることも、全くないわけではない。

いや、だが、そのようなことは些細な問題なのだ。誰とて失敗はする。他人に厳しく自分に優しく、というのが性根の腐った人間だというのなら、自らに寛容になれる人間こそが他人を大事に扱うことができるというものである。

「中尉。私も整理整頓をなさるるように、と日々申し上げておりましたが」

「私は何がどこにあるのかわかっているからいいですよ!」

仮にそれが事実だとすれば、掃除をする余地などない。

この女、自らの所業を正当化する言い訳については一級品である。

勿論のこと、部下が上司の仕事場を荒らすというのなら、特に軍において推奨は出来まい。ただし、今回の事情は荒れに荒れた畑の残骸を、雑草を抜き、地を耕し、再び実りある大地へと還元してやったよなものであるからして、その定義には当て嵌らないと言えよう。

第一に、彼女は事前にカツサンドラからこの旨を伝えられていたのだ。すっかり当人は忘れていたが、少女は出撃から戻ったところで上官に作業の実施（提案ではない）を伝達していた。聞き流して面倒臭いと適当に頷いたのは、中尉殿自身であった。

何時からか、あの小娘はやたらと反抗的になったように思う。薬を使おうとすれば口煩く身体に悪いだとか金の無駄だとか、ご忠言をくれるようになっていた。

別に他人が使うならば放っておいていただきたい。あれも戦闘に慣れてきてはいるが、単独で夜間哨戒に出せるほど樂觀はできない。だから自分が毎度のこととして夜に出撃する必要がある。故に薬でもなければやっていけないのだ。

何を言ってくれたところで將軍からの使用許可はおりにている。大体こちらが立場は上だ。

副官が溜息をついて、眉間を指で押さえた。

「おや、頭痛ですか。それとも目がお疲れで?」

「分かっているでしょう、中尉。いい加減素直にご自分の非を認められては如何ですか。毎度のこと、子供じやないのですから」

「まだ副官さんより若いですよ」

年の事を男が口にする、タリアは途端に——これは比較としての気分の落差であるが——機嫌を悪くした。机にべたりと突っ伏したまま、元から面白くもなさそうに寄せられていた眉が、その間の皺を深くしたのである。

若い女性らしく、と言つてはあまりに彼女が気の毒であるが、それなりに年のことは気にしているようだ。実際、女性に三十路が近い、など言うことは自殺行為と同じである。しかし、ここで副官が彼女に対して何か揶揄するようなニュアンスで物を言っていたということはない。

単なる苦言。注文、忠告といったところだろう。彼は彼で、プライバシーに関わる部分では色々と問題がある、もしくは、極めて紳士的かつ熱烈的な被隷属的精神への崇拜者であると前置かねばならないが、一般的な意味において親切な男だった。つまり何事も、いくら異端とされうるような反倫理的とも思われる性癖であったとしても、表に出さなければそれは善人のそれと見分けが付かないものなのだ。

どいつもこいつも、上官という存在をなんだと思つている。

民間の話ではないのだ。これは軍事の話である。

上官というのは偉くて当然だ。威張つているのが仕事なのだ。それをなんと心得ているのか。

副官といい、あの娘といい、である。特に前者は今までここまで口煩くなることは少なかったように思うが、どうだったか。

成程、合点いった。

「子供、ああ。副官さん……流石に、アレはないでしょう」

「違いますよー！」

「あ、扶桑人形でしたね、お好みは」

男を黙らせるのにはこの話題が一番だと知ったのは何時だったか。人間凡そくだらないといつて然るべき生き物だと思ふが、面白いことに男衆というのは、仲間内ではどの娘と寝てみたいだとか、あの胸の形がいい、いや尻がいいなどと喋るくせに、こちらがお宝写真^{グラビア}などを掲げて尋ねると黙り込むのが大半である。

大体、連中がこの無駄に育つた双子山を頭に浮かべつつ何をしているかということなど、とづくに分かりきつたことなのだ。だということに、この副官を含めてどうしてか彼らはいたたまれないような面をして地面を見つめるのだ。

「おお、いいことを思い付きましたよ、副官さん」

「やめてください」

「いえ、あの新人の前で肩が凝ると言ってみたくなっただけで」

「絶対に飛びかかられますよ、そんなことを言えば」

タリアはげらげらと下品に笑って肩を回した。

彼女にとつて数少ない長所が胸部脂肪であった。勿論のこと、彼女自身それを自覚しており、煩わしいと思いつつもそこに多少の割合で優越感を感じてもいた。

再三再四述べてきたことだが、カツサンドラのそれは名前の立派なことに比べると多少、少しばかり、気の毒と思える程度には貧相であった。肋骨の上に皮膚とせんべいが二・三乗っているようなものであった。実家はなかなか裕福だというのに、天が彼女に与えた耐寒性はさほどよろしくないどころか恵まれていないと頷ける程に軽量化されていた。

そしてカツサンドラ・レディ少尉は気が短い。改善の兆候を見せているとは言え、これは彼女の名誉に関わることだ。

こういった事態に男性は慣れていない、というより慣れたくはないだろう。二股の末の痴話喧嘩、修羅場だというなら色男だと誇ることもあるかもしれないが、ただの女性の喧嘩に巻き込まれたいというのは、理解しがたい傾向である。キャットファイトを眺めたいというならともかくとして。

そんなことを考えていれば、最初に怒鳴ったのを聞いたのだろう。貧^レしき者がテントに踏み込んできた。

「——中尉、どうされたのですか。なにか御用でしょうか」

「まず、私の机を勝手に片付けないでちょうだい」

「事前にお伝えしていましたが」

カツサンドラが言った。

「ああ、まあそんなこともあったかもしれない。でもね、どこに何があるか分からないでしょう。困るのよね、そういうの」

「中尉……中尉。あの、メモが」

「メモ？ そんなものどこにあるのよ」

可能性としては、確かにありえない話ではないだろうが、その肝心

のメモ用紙が見当たらない。見回してみても、どうにもそれらしきものは発見できない。

これには位置関係を明らかにする必要があるだろう。

タリアは比較的机との間に距離を設けず、天板に肘を突いて椅子に座っている。彼女が早速散らかした書類と筆記用具などもそこには転がっていた。

灯台もと暗しという言葉が扶桑に存在するのだが、タリアⅡスミスの場合は今回は意図せずしてその諺を体現してしまっていた。

例えばヘルメットを着用すれば視界が狭くなる。帽子を被れば上が見えなくなるのは当然のことだ。

中尉、と言ったカツサンドラは、机の上——丁度タリアの胸の影で隠れていた書付を無表情で救出し、差し出した。そこには物品の在り処が全て丁寧な字で記されていた。

「あ、ああ、うん。そこにあったのね。いや、あー……」

元からからかってやるつもりだったのだが、想定外のところで鼻っ柱をぶん殴ってしまった。

こうなると追撃をかけるのは気が引ける。

気まずい様子で煙管を探し始めたタリアである。

何かと小心者なので、自分の考えを超えた事態には弱いのだ。

少女は恨めしげにぶつぶつと口の中で呟き、遂にそれを言語化して口に出した。

「どうして……どうして中尉のはそんなに……」

「どうしてと言われてもねえ……血筋ってやつじゃないの、こういうのは」

記憶を覗く限り、レディの親も似たようなものだ。自分の親もそれなりに大きい方だったと思う。

馬や犬はかなり交配実験が進んでいたと覚えているので、たぶん人間も同じように親の性質が引き継がれるのだろう。男の上背などを考えると、やはり女の胸もそんなところではないだろうか。

こういう問題はカールスラントのお家芸だったはずだが、思い出すとあの国はネウロイに滅法手酷く痛めつけられていた。そうなると

豊胸実験など仮に誰かが研究するとしても発展は何十年と後の世になるだろう。何より何十年も後に人類が地上で生きていけているのかも怪しいのだ。そんな時に胸を大きくする試みなど、誰も手を出さない。

中尉殿は立ち上がりカツサンドラの肩を抱き寄せると、意味もなく何度も頷いてテントの骨組みを指さした。

「そう、そうね。このテントの骨組みみたいなものでき。この中って骨組み以上に広くなることはないでしょう？ それは、そう。うん、そういうふうに設計されたっただけでね、別に良いとか悪いとか、そういうことじゃないのよ。たぶん」

「そうですか」

人によつて事情は違う。

この娘が訓練校でまな板だとか、そんな陰口を叩かれていたことは分かっている。

打たれ弱いとは知っていたが、凹むところはここなのかと言いたくてたまらない。それを口にするほど馬鹿でもない。

苛立ち紛れに弄つて遊ぼうと思っていたのに、まさか落ち込まれるとは思っていなかった。

彼女も意地は悪いが面倒見まで悪いというわけではない。

すっかり消沈した部下に困った挙句、彼女は斜め上の行動に出た。

何かくぐもった声がタリアの胸から発せられた。中尉殿は迷って混乱してか、胸の大きさに悩む部下を勢いのままに豊かな胸に沈めたのである。

タンクトップであった。軍服などという味気なく硬い生地（軍服を好むという紳士もおられるだろうが）ではない、柔らかな綿の生地に雲を詰めたかのようなクッションに、少女カツサンドラは顔面から突っ込んだ格好である。なお中尉殿の顔はうなぎゼリーを調味料なしで食べてしまった人間を彷彿とさせる。

「あー、あの、うん。なんかそういうこともあるわよ。星の巡りが悪かったり、何かあるんじゃないの」

「……恨めしい、妬ましい……」

「あのね、あんたもう少し——つてやめなさい！ 腹を摘むな！」
追記しておくが、体脂肪の付きやすさというのもある程度遺伝する。タリアは要するに栄養素の吸収率が良いのだろう。

悪態をついていた彼女はふと、自分たちを見つめる暖かい不愉快な視線に気がついたようで、顔を中年の男の方へと向けた。

特務課に補充人員は必要なかっただろうか、とタリアが考えたことは想像に難くない。

——転じてそれは真夜中の上空であった。

雲が千切れて月光を透かしている光景は、見慣れていても悪くはない。良い具合の三日月なので、これを写真に残したなら見事なものになるだろう。

最近の子供はよく分からない。あれだけ自分に突つかかってくるのに、飯を食うなりあの娘は寝てしまった。寝ている姿だけなら可愛いと思うわけではないのに、起きてしまうと口煩く細かく面倒事ばかりを引き起こす厄介な部下になるので、人生とはままならないものだ。

寒い、と呟いてタリアはマフラーを巻き直した。未だ彼女はカツサンドラを夜間哨戒にやることだけは許していなかった。タリアがナイトウィッチの真似事をしているのには、彼女の固有魔法がある程度リーダーの役割を果たすからという理由がある。

未熟な魔女では最悪先制攻撃で墜落させられかねない。そうなくてはこれまでの彼女らの努力は水泡と化す。慎重になりすぎるくらいで丁度良いと中尉殿は考えているのだ。それが攻め時ならば違いうだろうが、人類は未だ防衛戦の真っ最中である。彼女はそれを十分に解していた。

魔女の命は重く、魔女の力は大きく、魔女のもたらす影響もまた、常人の認識を超えるまでに肥大化しがちである。

だから駄目なのだ、と彼女は部下に数回言い含めていた。

あの娘もよく生き延びているものだ。

今までで最長記録かもしれない。新人という意味なら間違いなく

記録を更新しているだろう。

ならば新人以外は、という嫌な気分になる。

何人が死んだことか。何人が墮ちたことか。死んだ中の何人が生きていれば、今も自分は満足に眠ることができていたのだろうか。

問うても仕方があるまい。だが、一人の空はどうにも気分を感傷的にさせる。

終わったことは考えても意味がない。

あつてもらっては困る。

意味がある死など、そんなものは考えたくないのだ。

「おや、来た」

彼女の固有魔法が大きな反応を示していた。異形の接近である。

タリアはそれが稀に見る豊作であることを感知し、通信機を口元に近づけた。

「こちらクローバー7。応答願う。繰り返す。こちら——」

あまりに反応がないので耳から通信機を外して眺めると、無線が一切働いていないことが表示の不具合で察せられた。即ちどういった次第か、通信圏内にいたはずの自分が味方との無線通信を絶たれたということだ。

すわ故障か、と拳で叩いてみるが何も変わらない。整備班が怠けたわけでもないし、自分は基地を出る際に機器に異常がないことを確認している。

——ああ、成程、そういうこと。

タリアは下げたライフルの弾倉を確認し、危機にも拘らず穏やかに笑った。

「機能特化型。通信を阻害する機能ね。ああ、そういうのは人が多いところでやってくれると嬉しいけれど」

10や20ではきかない数だ。

どうして今更と思うが、戦果は戦果ということなのだろう。ここ以外の区域が突破できないなら、戦力を集中させて、例え戦略的価値が少なからうと防衛戦に穴を開けようとするのは道理である。

この基地を突破して回り込む、或いは拠点・巣にしてみようのか。

何にせよ素通りさせるわけにはいかないだろう。反転する余裕はない。現在自分が敵の通信妨害圏内に入っているのなら、むしろ退いて基地全体をその領域に入れてしまうのは拙すぎる。しかもそれ以前に数が数なので、基地の全戦力を集中させたとして撃退は厳しかろう。どうあれ援軍が呼べなくなるのなら死体を増やすだけになる。

「となると、仕方ない」

タリアは不意に左手を顔にやった。

涙を拭く動作にも似ていたが、違う。

その手は左目に掛けられた眼帯に触れていたのだ。

否、触れたのではない。その手は眼帯を剥ぎ取らんとしていたのだ。

撤退は無理。敵殲滅など論外。ならば無理を通してでも踏みとどまって、魔女の援軍を待つしかあるまい。

自分だけならば、それが可能なのだから。

明るい夜闇に炸薬が破裂し、初段が幅広の傘をもつ茸のような形状の大型ネウロイを狙撃した。

スコープに押し当てられた右眼と共に、そこでは眼帯に隠されていた左眼までもが魔力光に燦然と輝いていた。

然るに魔女は眠りたい

目が覚めたのは夜も更けた、天幕にぼんやりと月光が移りこむ時間のことだった。寝つきはいい方で、布団から放り出されない限り決まった時間以外に起床した例がなかったので、誰かが自分を起したに違いない。

だが、室内に人影は見られない。

不思議に思っていると、その言葉だけがふと聞こえてきた。

総員起床、直ちに撤退準備——伝令である。

だが、とカツサンドラ・レデイ少尉はアイロンをかけた軍服に素早く袖を通した。

一体誰がこのような意味不明の伝達手段を採れるというのだ。自分の耳に無線機はない。ということはその場で呼びかけられたのではないなら、他人の声が聞こえる由縁がない。

疑問を解決することなく屋外に出ると、既に基地は怒号と戸惑いの会話に溢れる戦場となっていた。砲撃音がなくとも、尋常の事態ではないとの判断は容易い。

そうなれば、夜間哨戒に出ている中尉の代理として指揮を執るのは、自分となってしまう。中尉は居ないのだ。指示なら出せるかもしれないが、このような緊急時に自分が部隊を動かすとなると、自信がない。

その時、丁度自分を探していたらしい中尉の副官の姿が見えた。

「——レデイ少尉、何かこの現象に心当たりはありませんか！」

「副官さん、いえ、私もこのようなことは——」

親しみ深い男も矢張りこの事態については把握できていないらしい。

彼は眉間に皺を寄せたまま、

「中尉が何かされたのか」

と呟いた。

自分としてもその線が濃厚であるように思われる。何しろ、あの中

尉だ。何か気に入らないことがあって、それで八つ当たりをしないと
は言い切れない。

言い切れないような人なのだが、戦場で悪ふざけをする人でもな
い。

カツサンドラはやけにしおらしげな表情で爪を噛んだ。

上官への評価は酷いものだが、それでも自身のその評価を覆した
い、あたかも誰かにそのようなことはないかと否定して欲しいかのよう
に、少女の表情は移ろいでいる。

喧騒の中にあり、彼女の煮え切らない態度はよろしくない。しか
し、責める者も居なかった。騒ぐ兵たちもこの事態を飲み込みかねて
いる。逆説的に、であるが、それはタリアが紛い形にも上官として一
定の支持を得ていたことを如実に示していた。

男だけでなく、カツサンドラもいくばくかの信頼をタリアに寄せて
いたのだ。もしこの事態を引き起こせるとしたら彼女だけ、と発想は
しても悪意的とは思わない。

そんな中、どうにも暢気な調子でネウロイの大侵攻だつて、と中尉
の声がした。声、とはいうものの、鼓膜が捉えたにしては鮮明すぎる。
誰も彼もが混乱して騒ぐ中で、中尉のメッセージだけが浮上している
かのように、頭蓋に響いた。

「ち、中尉?! これは一体どういうことですか!」

カツサンドラが虚空に叫ぶと、どこから返答がこだまする。

侵攻である、緊急事態である、直ちに撤退し、部隊の維持に努めよ、
と。

——なんなのだ、この現象は。その場に居ない人間の声がする、そ
んなものは今日日安物のロマンス小説でも使い古された展開だ。

大体、自分は中尉を熱烈に想ったことなどない。断じてありえな
い。仮にロマンス的な奇跡だとして、それが起こるとしたら自分では
なく、中尉殿の極めて無駄かつ無様に膨れ上がったご成長なされた肥
満的な胸部脂肪に、不躰で下品な視線を向ける阿呆共に降りかかるべ
き奇跡だろう。

もし、そんなことが現実であるとしたら、それこそ魔法のようなも

のではないか。

魔女としてどうなのか、という彼女の思考であるが、これは仕方がないことだ。何故ならば士官学校ではどうあれ、カツサンドラ・レデイがこの部隊に配属されて以降、タリアが施した教育は正にそうした、魔法といった要素を最大限排する方針だったからである。

多少優れていようと魔女も人間、死ぬ時は死ぬ。無理なものは無理。

故にこそ、これは一種の背信行為である。

親愛なる中尉殿は、全く以て度し難いほどに正々堂々と、部下たちに嘘を教えていた——いや、本当のことを言わなかっただけ、と彼女は言うだろうか。

そういえば、嫌なことを思い出した。

初めて中尉の固有魔法を知った時、アレは何と言っていた。

少女の口元が苛立ちに歪んでいく。

騙されたことへの憤慨か、現状への逆上か。本人も分からないだろうし、実際そのどちらでもあるのだろう。真相というのは実につまらないものだ。事実と真実が微妙にその意味するところを異としているように、言葉遊びというのは気が付けば面白くもなく腹立たしいだけのものだ。

幸いにして融通は利かないが出来のよい頭をしているので、少女は五つも数えない内に真相に辿り着いたのである。

ふざけるな、とカツサンドラの喉が震えた。

「ふざけないでくださいよ！ 何である時、もっとしつかり言わなかったのですか！」

「少尉、とりあえず撤退の指揮を……」

「ああもう、副官さん！ 砲台からどんどん運んでください！ ああ、ああ!! もう馬鹿らしい！ 本当に念話が使えらなら、先に言ってください!!」

だって訊かれなかったし、とタリアの念話の口調がいじけたフリをした。

思わずして副官も、カツサンドラも、当然物資を運んでいた色男た

ちも、一人残らず一斉に溜め息を吐いた。客観的な意見だが、ネウロイの大群の前でこの嘆息の旋風を披露することが出来れば、あの厄介な黒坊主など簡単に吹き飛ばせたのではないだろうか。

あまりにも脱力してしまい、誰かが弾薬箱を足に落とすのか、痛い、という情けない声が基地の只広い空間に響き渡ってしまった。

今の今まで、あの女は切り札を隠していたのである。それはさながらギャンブルのように、もしくは、ただ言うのが面倒くさかったのかもしれないが、どちらにしても彼女に関しては否定する者も居まい。

「ま、知れたところで役に立つことはあまりないでしょう」

「それはそうですけどね……皆さん手を止めないで、急いで撤退を――」

撤退をして、救援を呼び、それでどうする。

元も子もない中尉殿の言葉に（通常、通信機がある以上念話で何かを伝える必要がない）、一度はカツサンドラの脳天にまで駆け上がった血液が、急激に冷却された。

彼女の思考の裏ではタリアがカツサンドラに殿を務めること、ストームウィッチーズに迅速な救援信号を送ることなどを指示している。勿論、念話が成立していることはタリアもまたカツサンドラの脳内を覗いているということだが、あえて無視しているようだった。

味方の退却を助ける。殿にて中尉の撃ち漏らしを切り落とす。いだろう、それは構わないのだ。自分以外には出来ない。そのまま徐々に後退し、やがて来るだろう統合戦闘飛行隊――ひいては陸戦ウィッチたちと合流する。それも良い。

中尉はどうするのだ。

カツサンドラは出撃ハッチに辿り着くなり、飛び込むように飛行脚を着装、決して多くはない魔力量ながら無理をしてライフと機関銃を担ぎ上げた。

この頃には副官も、そして部隊の男衆も現在自分たちが迎えている局面を正確に理解していた。当初ざわめいていた空気も、意味もなく

張り上げられた声も、最早存在し得ぬ。必要最低限の言葉を取り交わし、唯、作業に没頭することで導き出される結論と向き合おうとしている。

この状況に陥ってしまった。時間が巻き戻らない以上、人間が出来ることは無いと悟っているのである。総員が兵士だからこそ、その無情に理解が深かった。

「あなたは、どうされるのですか……？」

「まあ、まあ。気にすることじゃない。そういうものさ——こういうものだよ。場末の指揮官なんて、特に私みたいな……嫌がらせ達者の指揮官なんてさ」

タリアの指示はその場凌ぎにしては悪くない。だが、そこに彼女自身の生命は考慮されていない。

当然である。敵影を発見したのは彼女であり、戦闘を開始したのも彼女であり、味方が来たところで被害を増やすだけならば、即ち一人で戦い続けるしか方法はない。

もし中尉殿が引いたならば、基地の兵たちが撤退するだけの時間など存在しない。更に機能特化型ネウロイの通信妨害範囲に入ってしまったら、救援要請すら儘ならないという最悪の状況が出来上がる。

指揮官として、上司として、そして何より無辜の民を守る責務を与えられた魔女として、彼女はあの場、独り法師の夜空で戦わねばならないのだ。

望む・望まぬ、出来る・出来ないなどという次元の話ではない。

やらなくてはならぬ。

やる理由がある。

やるべきである。

そうせねばどうにもならない。

故に、孤独であろうと圧倒的劣勢にであろうと、或いは彼女が幾ら奮戦したところで部隊は全滅するかもしれないとしても、その後の命の有無など真に瑣末な結果論でしかない。

今この時まさしくこの瞬間、タリア・スミスに逃走は許されず、タリア・スミスは闘争せねばならぬのである。

「あなたは、あなたはそういう人じゃあないでしょう!? どうしてそんな……」

馬鹿だね、とタリアは疲れた内心で返した。

「そりゃあ、使命なんて柄じゃない。でも結局どうにもならないじゃない。え?」

考えなしに兵になって、気が付いたら古馴染みの同僚は一人残らず死んでいて、部隊なんて重荷を任されてしまった。

タリアは語る相手を考えてはいないのだろう。独り言のように零した。

「面倒だけど、死んでいった連中は重荷のために命を賭けた。そいつらの負債が私に回ってきて、困ったことに踏み倒せない」

言葉に詰まった気配がした。

そうだ、当然だ。無理もない、この瞬間も中尉は戦っているのだ。ネウロイの大群と戦いながら、態々集中力を殺いでまで自分たちに伝令を送っている。

カツサンドラの中で何かが符合した。

死ぬだろうこと、それは兵にとつて常である。戦場にあるのなら老いも若いも男女もなく、いつかふとした拍子に死んでいく。それが道理だと魔女は説いた。

怖いのならば文字にして悔いを残すなど、彼女が言ったのだ。

然れども、魔眼の魔女は白紙で遺書を置いていた。彼女は自身の行動を無関心からそうしたのだと分析していたが、そうではなかった。

中尉は書けなかったのだ。

自分や、部隊や基地のことが気がかりで心配で仕方がなくて、未練を残すようなことをしたくなかったのだ。それこそ、最悪自分に重荷を押し付けるようなことにはすまいとしたのだ。

だからこそ、条件が揃った今語っているのは、自分が無理やりに背負った重荷を、共に過ごして戦った人々に受け渡す必要がないからである。

「……中尉」

「ええ、まあ、そうなるね」

「これは遺言ですね」

「ああ、そう。遺言だ、遺書かもね。とにかく計画通りにいけば——この程度、マルセイユたちが何とかするでしょう。あんたたちはそのま
ま、連中の下に付きなさい」

仮にその後別所に向かわされたとしても、今ほどの苦境にはなるまい。上層部から嫌われた上官は居らず、上手くカツサンドラがマルセイユに気に入られたとしたら、更に上手い展開もありうるだろう。

だからこそタリアは一人で残るのだ。

一人で戦い、一人で墜ちて、そうして初めて、彼女は背に押し掛かる数多の屍骸の重圧に、腰に纏わり付く人々に、正式に別れを告げることが出来るのである。

馬鹿だ、この女は馬鹿だ。大馬鹿だ。

なし崩しに押し付けられただけの責任をまともな形で果たす為、唯それだけの為に今宵死んでみせると言っているのだ。

「そう。そうだよ、そうだとも。私は大馬鹿だよ。でも、予定とは違うけれど、まあこれでようやく全て終わる。たぶん、きちんと綺麗に収まるはずだから——」

戦場に在り、殺意の矛先を一身に受けているだろうに、何処か嬉しそうに、力なく魔女は歌った。

「——だから、もう許してよ。いい加減、私も眠りたい」

故に魔女は眠らせない

長い、長い、ちょうど子供の額に浮いた汗が顎から落ちるまでの間が空いた。

男たちは手を止めることなく、何も言葉を発しないままに作業を続けている。

何か言おうとした者も、感情を形にできないまま喉の奥にそれを押し込めた。

彼らの顔に浮かぶのは——後悔なのだろうか。

上司である女性に、たった二十歳を数年過ぎただけの娘に、仲間の死という重責を負わせたままにしていたことを理解したのか。

それとも、それを知りつつも無力であることを理由にして、何もしてやれなかったことを自覚したのか。

どうせ魔女でないのだから何もできやしない、自分は一兵卒であるから指揮官の指示に従ってさえいればいい、これまでずっと一人で——たった独りでも彼女は自分や仲間を守ってくれていたのだからきつと大丈夫だ、そのような言い訳をもつともらしい大義名分として安堵していたのではないか。

機器がぶつかる音が鳴り響く基地に蠢く空気は重く、必要最低限の通達が行き交うだけで、本来喜ぶべき砲火の轟音が体の芯を震わせない状況が誰にとっても歓迎し難い状況であった。

少女もまた、通信機を手に沈黙していた。

カッサンドラ・レイの目には遙か上空の激戦の幻影が映し出されているのだ。彼女にとって面倒で世話がかかり適当にも程があり、いところを挙げようとする中々苦勞する上に数もさほどのものではなく、反面悪いところを挙げていけば雨霰と罵詈雑言が浮かんでくる上司が奮闘している姿を想起している。

あるいは実際に彼女はその光景を観ているのかもしれない。何せ、親愛なる中尉どのが有する魔法はモノがモノだ。脳内に思い浮かべた言語のみが先行して伝播しているとは限らない。

そもそも、魔法などというものは非常に不安定なものだ。如何に優

れた才を持つていようと、きつかけがなければそれに気付くことができな、という事態も珍しくはない。

場合によっては限定的にしか発現していなかった固有魔法すら、その本来の能力を発揮してしまうということがあってもおかしくはないのだ。実際、そのような事例は少数であるが報告されている。それを目撃した人間の中にはタリアの同期も含まれていたのだが、今は関係がない。

現在重要なのは、魔法的な要素がこの事態を打開し得るかということ、その一点である。

そして、カツサンドラの身に奇跡が訪れた様子はない。

「そう」

肝が太いのか、細いのか、多少疑問に思っていたが彼女は意外と繊細だったらしい。

自分は考えていなかった。

なんとなく中尉はいつまでも自分の上司で、いつの日か別の隊に異動命令を受けるまで憎まれ口を叩きながらやっていくものだと、そう思っていた。

そうであればと願っていたとまでは言わない。

好きではなかった。

でも嫌いかというと、そうでもない。

少女の意識の外側面には、未だ断続的にタリアからのテレパス通信が届き続けている。

撤退、ストーム・ウィッチーズの到着を待て、合流し迎撃に当たれと。

独り足止めを行っている魔女は繰り返していた。

だからこそ、である。

カツサンドラ・レデイの表情が徐々に変化を見せていた。

「ふざけないでください」

教官に嫌われ、このような僻地に送られて、そんなどうにも格好のつかない少女を拾い上げて鍛えたのは、かの中尉殿だ。

口煩いのが嫌だと何度も彼女は愚痴をこぼしていた。神経質で気

が利かず、士官学校出の癖に上官への態度がなっていないと、副官に何度も酒混じりの声で絡んでいた。

それでも魔眼の魔女は、見捨てることだけはしなかった。

何度も怒鳴りつけて、訓練では粘つくようにハンマー片手に追い掛け回し、実は悪い部類に入る酒癖を大いに発揮してワインを瓶のまま喉に流し込んだこともあった。千鳥足になった年下の少女を指差しながら笑っていたのも中尉である。

だから指示に従ってただ逃げていればよい——のか。

否である。

唯々諾々と従い、淡々と撤退の準備だけをしていればよいのであれば、その行為に納得しているのであれば小さな魔女は立ち止まっただいがない。

見捨ててもよいだけの大義名分は用意されている、然れどもそれを認めることができない。

足掻きである。

しかし、漠然とした表現をするならば、それは心地のよい悪あがきであった。

几帳面で融通の利かない少女が、今まさに命令違反を犯そうとしている。軍属としては失格だ。上官の命令に背いてはならない。士官学校どころか単なる新人教導の場においても、真っ先に叩き込まれることだ。

規則に厳しい少女が、この土壇場で指令に従うことなく、佇んでいる。

その理由は明白であった。

「いかさまで獲られたお金、返してもらっていないですから」

「……うん？」

中尉の裏返った声が兵たちの心に直接届いた。

ああそういうえば、と誰かが少女に続いた。

「俺も前に貸した金、返してもらってないな」

「——そういやあ、俺もワイン没収されたままだったな。アレ、いつか返すって話だったんだが」

「自分は箱ごと煙草没収された」

一人が言い出せば次から次へと飛び出す上官への貸し、我も我もと募り募って、いつの間にか作業をしていた人々の手が止まっていた。撤退作業はこの時、確かに停止した。指示があつたわけではない。むしろ中尉殿の思惑には反している。それ以前に、彼女の予想とは全く違う方向に話が流れ始めているのであるが——果たして、膨れ上がった声はシユプレヒコールのような合唱となり始めていた。

誰かが金を返せと言っている。

他の兵が酒を寄越せと叫んでいる。

また違う人間が休暇を認めろと空に拳を突き上げ、若干名が自身の尻の状態悪化を訴えた。

意見は多種多様であつたが、一つだけ共通していることがある。

二等兵から曹長、仮にこの場に將軍がいたとしてもそうしただろう。階位の区別なく総員がただとも挑戦的に口元をゆがませているた。

どうにも面白くて仕方がない、というように、犬歯を剥き出しているた。

これまでは一人残らず守られているばかりだった。これは、魔女が軍属として広く用いられるようになってから、あるいは更にそれ以前、有史以来怪異に行き遭つた人々はそうせざるを得なかつた。それが最適解であるとされてきた。

新人は古参ヴェテランに守られるもので、力無ければ逃げるしかなく、それが当然なのだ。

故にこそ、今、彼らはその当然に中指を立てようとしている。

「ちよつと、あんた、あんたたちね——！」

「まあ、そのついでに中尉を助けるくらいならやってあげてもいいかもしれませんね」

「そうですね。独り身で寂しく亡くなるというのは、ちよつと気の毒ですな」

あんた、あんたたち——と中尉の言葉が途切れた。

隣で副官が、好戦的に笑っていた。その手にはいくらかの弾倉と、

質素な拵えのクレイモアが握られている。

「副官さん、それは一体？」

「中尉の私物ですよ。折れたからって捨てられていたので、整備班がジョークで直していたものです。まあ、使うことはないでしょうが持っていてあげてください」

忘れ物ですからね、なるほど、と同じ上官をもつ二人は小さく領きあった。迷惑をかけられているもの同士、あるいは親愛なる中尉殿に恨みや親愛の念を抱くもの同士、何か言語化すべきでない感情を共有しているのであった。

気持ちと言葉にすることは重要である。

だが時として、無粋だ。

何も言わずに、勝手に他人の感情や思考を分かたつたような気分になって、そうして自分勝手に突っ走るのも人間の楽しみというものだろう。

故にカツサンドラ・レディは頷いた。自身の分だけではなく、大空で舞い踊っている誰かの為に、そして名前を覚えてすらいない後方の味方の為に、過重量であることが明らかな量の銃火器を背負い、腰には時代錯誤の刀剣を差して、闇に覆われた空を睥んだのである。

何の意味があるだろうか。敵が落ちるわけでも、味方の士気が高揚することもない。

しかしそれは——誰にともなく、何に対してでもなく、ただ己の信念と感情を裏切らない為に自己肯定の宣誓であった。

「皆さん、座標は私が指定します。砲撃の準備をッ！」

機械仕掛けの箒が唸り声を上げる。風が乾いた砂を舞い上げた。

「中尉、今夜はあなたを眠らせません」
後の証言によれば半数ほどの兵士が、その時タリアが嘖き出すのを聞いたと言う。

いやいや、とタリアは首を振った。

無理に決まっている。自分だって力の限界と言うものがある。な

るほど、確かにこれでも腕が立つという自覚はある。だとしても、数が数だ。ひとりで戦線を維持することなど、できない。

本当にできないのか。

タリアの思考に小さな疑問が生まれた。

それはくだらない想像でしかない。子供がままごとをして、夢を語るような小さな願いにも似ている。

実現の保証など、どこにもない。むしろ露と消え去る可能性のほうが、余程高い希望というにも馬鹿らしい展望である。

だが、と彼女の理性と反する心が自問した。

もしかすると、ひよつとしてひよつとするかもしれない。

基地からこの座標まで、空戦ウィッチの移動速度を前提とすれば間に合わないではないのではないか。

だとすれば、自分が墜ちるよりも先にレデイが合流してしまうのではないだろうか。

もし、合流してしまったのならば――、

「――お馬鹿！ この、間抜け！ 何を命令違反なんてしているのよ！ いいから戻りなさい！」

「馬鹿はそっちです！ 手遅れですよ、もう離陸しましたからね！」
「開き直るな、このまな板娘！」

この馬鹿とくれば、大体、どうしてこの会話が成立しているのだと思っているのだ。

自分がいなければ、この通信すら成立していない。自分で何をやっているのか、その代償が何なのかも考えていないのだ。

あの娘が死ねばどうなる。自分とは違う。家族もいる。兄弟がいる。地位もある。金だって、比べ物にならないほど動くだろう。阿呆かと言いたくなるほどに真面目だが、だからこそその人格を認める友人も居ないではないに違いない。

だというのに、何故ここまでするといふのだ。

たかだか一年にもならない関係だ。

そんなに命を懸けるようなことではない。何せロマーニヤからは遠く離れて、別にここで退いたところで祖国に直接打撃があるという

ことはない。大切な人間も、国土も、一切侵されることなく次の手を打てるはずなのだ。既に連絡が行っていることを考えると、マルセイユが到着するまでの時間は、部隊が後退することで十分に稼げる。いや、保証はないが自分が粘りさえすれば問題ないのだ。

タリアには一つの発想が抜けていた。

彼女が耳障りだとする部下の声、それを届けているのも彼女の魔法なのだ。

嫌なのであれば目を閉じればよい。ウインクなど似合いもしない女であるが、できない訳ではないだろう。

であれば、それを選んでるのは彼女自身だ。

意識の内にあるかどうか、それは問題ではない。

タリア・スミス、彼女自身が生存の可能性を選び続けているということこそが、真に重要な事態なのである。

嗚呼、如何に彼女が死のうと考えても、感情がそれを許すかどうかは別問題である。

理解と納得は別のものだ。

次元が違うのである。

筋が通り、理論が正しく、即ち理路整然ともたらされた結論であろうと、それを拒否する選択をできるのも人であるが故のことだ。

人間存在の希望として、愛と勇気の象徴として、誰一人それを望んで生まれたわけではないにしても、そういう存在である魔女だからこそ荒唐無稽な希望に向かつて無意識下であつても邁進を続けるのだ。

彼女は模範的なウィッチではなかった。

いい加減で、適当で、どうしようもない人間である。軍属でなければ、とうに妙な男に引つかかって破滅していたかもしれない人間だ。

しかし、魔女としては正しかった。

真正面から命に向き合っていた。

身を省みず、名前も知らない誰かの為に命を棄てる、その尊さを知っていた。

犠牲の下の日常を、その得難いことを知っていた。

だから論理的に死を選んでも、感情で生を掴もうとしていたのだ。誰が証明するでもない、この状況がタリアの生きようとする想いそのものである。

若干、不恰好ではあるが。

砲火を掻い潜り、弾丸が頬を掠めても、それでも戦い続けたのだ。

「——くそ、くそ！ もう、この馬鹿、阿呆ども！ なんで私の言うことを聞かないんだ！」

「そんなもの、中尉を助けたいからですよ！——理由はどうあれ」

「い、いや、金なんてそんなにないから！」

「嘘を吐かないでください！ 副官さんから聞いていますよ、箆笥の奥に突っ込んでいるのでしよう！」

「何で知っているのよ!?!」

基地に居る副官の記憶が流れてきた。

タリアのこめかみに血管が浮かび上がった。

「あんた、少女趣味だったでしょうが!!」

「仕方ないでしょうが！ 中尉みたいなボサボサの女棄てたひとのズボンでも、男には必要な時があるのですよ！」

完全にノーマークであった。

予想外だった。黒髪ブレネットの十五歳未満の扶桑人少女にしか興味がないものと思っていたのに、とんだ裏切りである。どうせ休暇になって帰宅した時に、娘にパパ汚いなどと罵られることを楽しみにしているものだと信じていたのだ。

ついでに言えば副官の趣味は危ない。色々と危ない。物理的な火遊びが趣味なのだ。対象になどされてたまるものか。

と、タリアの頭上を赤い光線が通り過ぎる。対空砲火の嵐が、女の魔力盾を打ち据えた。

にも拘らず、魔女は絶望していなかった。その表情は、いつものように厭らしく皮肉にゆがみ、不機嫌に眉を寄せながら口元を吊り上げていたのである。

この状態でも彼女の魔法は基地の兵士たちの思考を読み取っている。色々と内緒で楽しんだとか、口には出さないが日々の感謝である

とか、何故娼婦を金で雇ってくれなかったのかなどという苦情に至るまで、実にくだらないことばかりである。

今にも彼女は死なんとしてゐるのだ。

だというのに、何と薄情で身勝手なことか。

それが不愉快ではないのだ。

だから、彼女は笑うのだ。

腹が立つ。

どうにもならないかもしれぬ。

耐えて、凌いで何時間になつただろう。根性と言うのは扶桑人の専売特許ではなかったのか。自分のような怠け者が、どうしてこのような無茶をしなくてはならない。

だが、耐える。もう少し持つだろう。

何故かと言つて、それでもこの、くそつたれであほらしい連中を守ろうと思つて飛んでゐるのだ。

——分かつてゐるのだ。どうせ自分は半端者だ。死ぬに死に切れず、結局ここまで生きてきてしまつた。よくよく呆れ果てる。また、もう少しだけ、この苦行を続けようなどと思ひ始めているのだから。

「——この、石頭のまな板。ああ、全く。どうしてこうも思い通りにならないの」

そんなことをしていたから、とうとう少女に追いつかれるのだ。

数時間、十数時間も単騎による戦闘を経て、深夜を過ぎ、時刻は徐々に朝へと向かいつつあつた。

少女は間に合つたのである。

不恰好に多くの銃を担いで、そして中尉にクレイモアを投げつけて、不敵に微笑んだ。

「間に合いましたよ、中尉」

「ああ、そうね」

カツサンドラは口の片端だけを上げた。

ちやうど、タリアがそうするように。

「私の勝ちですね」

「かもね」

戦場が常に劇的な状態であるとは限らない。

だがこの時ばかりは確かに、彼女らにしては不釣り合いなほどに、劇的であった。

タリアは緩慢な動作で剣を引き抜いた。

銀の輝きが、彼女の冷静に見れば耽美な顔を照らす。

片手に重機関銃を、もう片手に剣を、とんだ銃剣一体の構えである。酷い構えだが、息を呑むほどに美しかった。

中尉は一度ネウロイの群れから距離を取り、深く息を吸い込んだ。

彼女の双眸が眩いほどに輝いている。豊富な魔力量に後押しされたとというのは風情がない。

ここに二人一組となった魔女が居る。それを異形の敵に示すように、爛々と意志の焰が瞳に灯っていた。

「……仕方ない。いくよ、カツサンドラ」

「了解！」

最早この娘はお嬢さんではない。

こちらの弱いところを的確に突いてくる、嫌な女だ。困った方に成長してくれた。

そんな彼女の心境を知ってか、カツサンドラはよし、と頷いた。

「では、砲兵隊！ 全弾発射!!」

直後、気の抜けた砲弾の迫る音がした。

意気揚々と基地の連中は砲撃を行ってくれたらしい。

座標は当然、自分たちの居るこの場所である。

成程、確かに自分の魔法は時差も間違いもなく情報を伝えるという意味で有用だ。瞬時の情報共有は自然なことである。

迅速な行動は悪くない。自分たちが着弾目標の傍にさえ居なければ。

「——この、お馬鹿!!」

——やがて夜明け、大急ぎで現れたマルセイユたちが目撃したのは、煤だらけで戦い続ける二人の魔女の姿であった。

通信機など使わずとも空に響く罵詈雑言の応酬に、「アフリカ」の面々だけではなくタリアの魔法の圏内にいる誰もが苦笑を禁じえな

かつた。

中尉殿の格好はといえば、衣服はほつれ、ところどころに血が滲むという悲惨なもの。汗臭く煙草くさく何処で呑んだのか酒のにおいすら漂わせている始末。

だが——不思議と彼女の表情は晴れやかであった。

やはり彼女は眠れない

少女は白けたような顔をして、かつての上司を眺めていた。女性の立派な胸の上には、白々しく輝く勲章が貼り付けてある。

先の大規模な戦闘から一月が経過していた。おおよその処理を終え、統合航空歩兵団を受け入れた基地は漸く落ち着きを取り戻したと言える。そこで、と開かれたのが指揮官であった我が魔女への表彰であった。

しかし悲しきかな、勲章の授与という晴れ晴れしい場において、つまらない表情をしているのはカツサンドラだけではない。マルセイユ——アフリカの星も、加東圭子も、その他合流した面子も以前からの兵士たちも、誰もが爽やかな青空の下で苦々しく口元を引き下げている。

原因は授与する女性にある。言わずもがな、タリア・スミスである。彼女は一連の戦闘とこれまでの戦績をようやくと認められ、縁起でもないことに一階級飛び越して少佐となったのであった。二階級特進であった。

その辺りに、上層部も彼女からちくちくと投げられていた言葉の矢に苛ついていたことが垣間見られる。

なお、やたらと長つたらしい名前の勲章と新たな階級を与えられたタリアは、他の人々とは反面素晴らしい笑顔を見せていた。何とも清々しい、向日葵が咲いたような鮮やかな微笑みである。それもそのはず、彼女は休暇を得ることに成功していたのだ。

まずストームウィッチーズが中尉殿、もとい少佐殿の基地に合流したということが大きかった。名実共に世界最高の魔女に数えられるマルセイユである。実力はそれなりだとしても、人格と知名度に極めて大きな欠陥のある我が少佐では、多角的に考えても比較にならない。

唯一タリアが勝てる点としては、その無駄に膨張し発育した胸の大ききくらしいものだろうか。

水浴びなどをすれば必ず黄の14に見せつけるように胸の脂肪を

持ち上げてみせる小物タリアである。

無論、戦術的優位性は一切ない。しかし、そこくらいしか勝てる場所がないので、周囲の人間は生暖かく見守っていたものである。

ともあれ何故、彼女はじつとりと湿りきった視線で眺められているのか。その答えに言及すべきだろう。

——これで全ては片付いた。

面倒な事務仕事は加東に委託投してあるし、カッサンドラの面倒はマルセイユに任せ押し付けたた。

もちろん無償ではない。きちんと礼に年代物のワインヴァンテールを加藤には渡してある。記憶が正しければ、きちんと自分で取り寄せたものだったはずだ。そのはずなのだが、何故か加東が気前よく、同僚にそれを振る舞った次の日から目線が冷たい。白が好きだったのだろうか。

ここからはストーム・ウィッチーズが居るといふのだから、配給が滞るといふことはあるまい。少なくとも以前よりはマシになるだろう。今回の侵攻で敵も奇襲のようなものを仕掛けてくるということ
が明らかになった。その意味でも手薄にされることはないはずだ。

そもそも、連中がアンブッシュを得意とすることなど、別に目新しい情報ではない。

ネウロイの侵攻というのは奇襲が基本だ。今は予測ができるようになってきているというだけで、突然現れて暴れてくれたからこそ、カールスラントのような大国が手酷くやられることになったのだ。現在世界各地で活躍する熟練の魔女を輩出する彼の国でも備えと心構えが足らなかつたのだ。今回の襲撃にしても然りである。

祖国はそれほどでもなかつたが、人的被害が相応に出たことは事実だ。自分はそれを知っている。目で見て、耳で聞き、堕ちた娘たちの言葉を伝えられている。

だから戦った。戦って、そして義務を果たした。

したがって、もう戦う理由はない。

式典が終わり次第、この砂だらけの土地とはおさらばである。

という次第である。

休暇は悪いことではない。

だが加東への半強制的な事務仕事の放棄と、マルセイユとの日常的な喧嘩が積み重なり、冷ややかな反応が目立っているというだけである。日頃の行いが悪いせいで、これまで長く戦場を共にしてきた部下たちも総じて苦笑いである。

件のワインは、当然部下からふんだくった賭け金のカタに奪い取ったものだった。そして口喧嘩にすら自身の固有魔法を小狡く使用し、アフリカの星・人類史に残るだろう英雄の弱点を抉りまくる大人気ない姿勢が、瞬く間に一瞬盛り上がったタリアへの信頼を瞬間冷凍していったのであった。

元よりやる気というものがなくおかげで、本人に戦場への愛着はない。彼女が嫌っていたのは無駄に死んだり、死んだ者を無視したりすることであつて、平穩は望むところなのだ。

では平和な世界で彼女に何ができるのかといえば微妙な話になってくるが、本人としては後方で怠けていただけである。

残った人間が頑張ればいい。やる気のある者が戦えばいい。

最初からそんな考えなのだから、悔いも無し。

世界的な兆候、地域的な視点、どのようなレベルでも戦争は終わっていない。人類は依然として脅威に晒されており、まさにこの時この瞬間とて誰かが無惨に死んでいる。

だが、少なくともタリア・スミスの戦争は終わった。

あらゆる皮肉と小言を抜きにして、今はそう言うべきだろう。

多くの人命と夢と希望と、ついでに酒と薬を消耗して、やっと一人の魔女は休息を得たのであった。

「中尉！」

「少佐だよ。少佐、いい響きだよね」

カッサンドラは息を切らしていた。

式典の後、早速バカンスを満喫しようと少佐殿は輸送機のタラップに足をかけていたのである。

「一声かけてくださればいいものを、どうしてあなたは毎回そうなんですか」

「面倒じゃない。どうせ小言でしょ」

「当然です！ ミス・カトーはおかんむりですし、あの方とは喧嘩してばかりですし……」

分かった分かった、と手を振るとカッサンドラは眉間に皺を寄せた。

感情がすぐに顔に出るところは、これからの課題だろう。自分とは違い出世は容易いはずだ。マルセイユの下にいて嫌がらせを受けるということはあるまい。

「それで何？ 酒でもくれる？」

タリアはまさかと思つて肩を竦めた。

その予想は外れ、なんと少女は背後に隠していた酒瓶を上官に押し付けた。

上品な包紙に包まれた一本の葡萄酒である。カッサンドラの趣味でないことは明らかであった。

「昇進祝いですよ」

「頭でも打った？」

「あげませんよ」

「いただきます」

ずっしりと重い。不思議とそう感じる包みを受け取った。

感謝なのだろうか。

それとも皮肉か。

分からないが、わざわざ明らかにすることもないだろう。

世の中には知らぬが仏という言葉もある。仏というのがどこの誰かは知らないが、いい言葉は適当に使つても意味が通るものだ。

タリアは一呼吸ほどの沈黙を挟んだ。

迷いというよりも、思考を間に挟んだといった様子である。

「まあ、あんたにしては悪くない贈り物だね」

「……最後までそれですか」

「何、感謝の言葉が欲しかったの？ え、そういうの私に期待する？」

「期待してませんよ！ 中尉、いや少佐は少佐だなあと感服していただけです！」

少女は膨れっ面を明後日の方向に向けてしまった。

どこまで行っても人の性根は変わらない。少佐は少佐として、いつも通りに素直ではなく捻くれているのだ。

歳のせいなのだろうか。それとも固有魔法が性格を歪めてしまったというのも、一説としては考えられ得る。

だがもつと無難な答えとしては、本人はきつと認めないだろうが、単なる照れ屋というのが有力である。

本心を伝える魔眼を塞いでいるのも、自分の考えを全て語ろうとしないのも、誰かに自身の内心を伝えるのがどうしようもなく照れ臭いからだろう。

一人の乙女を魅力的に見ることができるので、そのように考えた方がいいだろう。親愛なる少佐殿を乙女と呼ぶかどうかということは、後の議論に任せるとして。

「まあ、まあね……そうね。そうだね……」

だからこれは、俗に「柄にもないこと」というのだろう。

「ありがとう」

発動機の駆動音でまともには聞こえなかっただろう。

そのつもりで彼女は小さく口にしたのかもしれない。

しかし少女には確りと聞こえていた。間違いなく、感謝の言葉が届いていた。むくれていた表情は驚きに満ちて、そして薄い涙と共に笑顔に変わった。

「……よく聞こえなかったのもう一度」

「調子に乗るんじゃない」

「乗ってません。ただよく聞こえなかったのもう一度と」

「喧しい」

「へえ、へえ。そうですか。少佐が……ふうん」

にやりとカッサンドラが笑った。

どこか上官の仕草を思わせるような、嫌らしい表情であった。

この娘とくれば、意味もなく嫌なところばかり吸収して役立ててくる。

なんといいのか、素直なままに育てばよかったものを、どうしてこのような素直で可愛らしくもない部下になったというのか。

言うまでもなく自分のせいだ。

だとして、気に入らないが。

なんとなく同属嫌悪というには及ばず、居心地が悪いのだ。

「とにかく、私はもう行くからね。ふん、せいぜい野垂れ死ぬことのないようにしなさいよ」

「はいはい、分かっていますよ。素直じゃありませんね、全く」

「く、この……！ まあいい。とにかく、マルセイユに頼りなさい。あいつならそんなに妙なことはないでしょう」

「言われずとも少佐よりは頼りにしていますよ」

「ふん」

憎まれ口の応酬のように見える。

だがこれが彼女らの交流で、ある意味仲の良いことのしるしだ。

本当に、もう少し簡単に率直に自分の感情を表せば良いものを、ご苦労なことである。

タリアは輸送機の席に着く前に、もう一度だけ振り返った。

「——死なないように」

「了解！」

少女は敬礼を返した。

命令ではない。

単なる願いに、懇願に——敬意を示した。

レシプロが喧しく吠え立てた。出発を告げる旗が揚がる。

魔女がひとり、旅立つ。

しめやかに、静かに、見送りの者は少なく、それでも堂々とした去り際であった。

思えば老兵の失せ際というのは、こういうものが理想なのかもしれない。新兵に気遣わせることもなく、将兵を煩わせるでもなく、ただ居なくなる。最後までやることを遣り通し、満足の内に戦場を去る。戦いはいまだ続くが、それでもひとつの区切りがつく。

と、言えたならよかった。

「——スミス少佐！ 一体どういうことですか!? 休暇申請の期間がおかしなことになっているのですが!? 私が見たときには半年だっ

たはずなのに、この文面では一年になっているのですが何か心当たりは!？」

加東圭子であった。

猛然と走っている。最近体力が落ちてきた、と自己も認める体ではあったが、それでも全力疾走であった。

何しろ、この隊である。タリアが指揮していたのである。様々な面倒事を押し付けられ、そしてこれから文句を言われるのである。

その期間が単純計算で二倍だ。抗議も当然である。というか、公文書偽装である。

タリアは無言で輸送機の昇降口の扉を閉めた。

「こ、このっ!! 確信犯ですね!？」

「聞こえませーん! さあさあ、さっさとロマーニヤに出発しなさい!」

「そんなことだから上層部に嫌われるのよ!」

「ああ、小言が煩い。だから行き遅れるんですよ、加東少佐!」

「似たようなもんでしょうがっ!!」

「……出発してよろしいですか?」

操縦席の兵が訊ねたので、出発と手で伝えた。

操縦桿を握る男はそれでも指示に従ってくれて、きちんとプロペラの回転数を上げ始めた。

窓からは地上に残る、この乾いた大地で戦い続ける面々が色々な表情でこちらを見上げている。加東は言うまでもなく、いつのまにか集まってきたいたらしいマルセイユはとても子供らしい身振りで再戦を誘っていた。

部下は、たった一人、自分の下に居ながら生き残ってくれた娘は、笑っていた。

何か、これが自分らしいと言いたげである。自分だつてやればできるのだ。それを、あの娘は全くふざけている。

いや、自分らしいではない。

この隊はどこまでもこんな調子なのだど笑っているのだ。くだらないことで苦勞して、つまらないことで笑うのだ。

それでいいと思うから、とうとう自分も毒されている。

タリアはポケットの大麻葉巻を啜えようとして、そのまま握りつぶした。

「ま、こんなものなら上等かな」

大空に飛び立った機体は真直ぐに大気を切り裂いて進んだ。

彼女の仕事は終わり、これにて休息をとる。

ようやく、魔女は眠りにつけるのであった。

——そのはずだった。

「——見えてない、見えてない……ネウロイの砲撃なんて、見えてないからね」

ロマーニヤの海岸、砂浜にタリアは寝そべっていた。

大胆なビキニ姿である。彼女の唯一の美点といえるプロポーションが存分に発揮され、恐らく男性であればそれなりに惹かれずにはいられない、その様な格好であった。

にも拘らず、彼女に話しかける者はいない。正しくは、数分前までは居たのである。残念ながら彼女はロマーニヤ語を理解できても喋られるわけではないので、白馬の王子様作戦は起点において失敗していたのだが、それだけは彼女の名誉の為にも記しておこう。

問題は異形であった。

鳴り響くサイレン、上空を通り過ぎる機械仕掛けの筈。

戦闘である。

嗚呼、悲しきかな。休暇先でこのような目に遭うとは、本当に不幸な女である。

しかし何故か、どうにも予定調和のような気がしてならないが、本人にとつては死活問題である。なにしろ、散々加東の嫁ぎ遅れを馬鹿にしたのである。ここで婿殿候補の一人二人は集めておかないと、女として負けである。というか、顔が立たない。

「そこのおにいさん、今暇!？」

声をかけた男性はたぶん「たすけて」と叫んで走っていった。

「こんなの夢だ……酷いじゃないか……なんで私ばかり……」

しくしくと泣きたい気分の少佐殿の傍らにネウロイの機関砲が線を引いていく。

舞い上がった砂が、彼女の目を潰した。

「……………」

砲撃でビーチにクレーターが出来る。

またもふつとんだきめ細かな砂が、彼女の顔面を強打した。

「いや、いやいや。休暇だから。休んでいいはずだから……………」

続いて墜ちてきたのは、少女だった。

辛うじてシールドを張ったのか、大きな怪我は見られない。

しかし継続しての戦闘は厳しい。痛みで呻き、背を丸めている。

そこに小型のネウロイが風を切って現れた。

とどめを刺さんとして放たれた光線を遮ったのは——タリアが展開した大型の魔力盾であった。

「この戦闘だけ……………この戦闘だけ……………」

「あ、魔女の方ですね！ 皆さん、ちょうど居合わせたウイッチが助けてくれました！ 大丈夫です」

「がっ……………!? この余計な……………」

そして何故だろう。

ビーチを急襲したネウロイたちが一斉にタリアに銃口を向ける。理不尽なことに、彼女が一度だけ攻撃を防いで離脱することは難しいようだ。

タリアは怒った。

それはそうだ。何年も待ち望んだ休暇なのだ。このような形で潰されては、平常心を保つことはできない。

「私は、ただ眠りたい、だけなのに……………！ いいかげん、私は眠りたいのよ——！！」

可愛そうに、彼女は落ちてきた魔女の手にある銃器を奪って水着姿で突貫した。

どうにも締まらないが、彼女のやることなど基本的にこのようなものだ。

だからこそ、このように彼女は戦い続けるのだろう。

いつだって個人の事情など、世界や国は知ったことではないのだ。いつかまた、これまで背を預けてきた誰かと再会して、また戦場に赴く時が来るかもしれない。

その誰かが何の気負いもなく眠りに就ける時にこそ、彼女も深く、邪魔されることなく睡魔にその身をゆだねることができのだろう。

希望的観測に過ぎないが、その時彼女はひとりではないにちがいない。

きっと誰かが——彼女と正反対で、どこか似通ってしまった少女が、そこに居るはずだ。